
ボクはスキだらけのストーカー

夢者川 亮義

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ボクはスキだらけのストーカー

【Nコード】

N5612U

【作者名】

夢者川 亮義

【あらすじ】

主人公『隙有杉彦』すぎありすぎひこは、ストーカーである。獣のような容姿に変化した凶悪犯罪者が急増する現代で、渦中に巻き込まれた杉彦は、対獣化犯罪組織『シルヴァー・ハント』に所属するヒロイン『氷群・ハイリツヒシユタイン』ひむれに救出される。以来、杉彦は氷群の“追っかけ”となつて四六時中ヒロイン漬けの日々を送っていた……。・*著者としてはストーカーをライトな描写で書いたつもりですが、ストーカーに苦手意識のある方は閲覧を控えていただいた方がよろしいかと思います。

【1】主人公の日常

午前八時三三分四一秒。彼女が自宅から出てきた。

昨日より二分十五秒ほど遅い。おそらく肌荒れが原因だろう。

昨日よりも化粧のノリが若干悪い。整えるのに時間を要したはずだ。なんだろう。

悪いものでも食べてしまったのか？寝不足だろうか？

そういえば昨日の戦闘は少し長引いていたし、単純に寝るのが遅かっただけだろう。

それ以外に特に変わった様子はなさそうだ。

相変わらず黄金の如く輝く美しい髪がまぶしすぎる。まばたきを堪えるのもひと苦労だ。目は切れ長で、絶妙な角度でつり上がっており、中には宝石の如く光るエメラルドブルーの瞳が浮かんでいる。鼻は数学者が絶賛しそうなほど見事に整った直角三角形になっていて、口は筆奉行が全身全霊を賭けて書いたような力強くも美を追求した真一文字。そこに薄く赤いルーージュが唇を優しくふわりと浮き立たせている。それになんと言っても滑らかで波状のはっきりした柔らかな曲線を描く肢体も、実に芸術美に溢れていて感嘆に値する。今日も世界中の女性が彼女の美しさに嫉妬し、ハンカチを噛みちぎっていることだろう。そいつらに彼女の爪の垢でも煎じて飲ませたくらいだ。いや、飲みたいのはむしろ俺の方だな。

とにかく今日も別段問題なくて何よりだ。

午前八時四八分三九秒、『シルヴァー・ハント』本部ビルに到着。幸い、今日は男とすれ違わなかった。

実に良き日だ。少しでも男と関わる機会は避けてもらいたい。

彼女の溢れんばかりの魅力の前では、どんな男も衝動を押さえられないはずだからな。

これで職場が電車で通わなければならない場所にあつたら最悪す

ぎる。

満員電車など女性に飢えに飢えまくった男の密集地帯ではないか。戦場よりも危険な場所に彼女を迷い込ませるなど言語道断。

一秒でも考えただけで怖気が走るのでやめておこう。

午前九時二二分一五秒、戦闘訓練開始。

まずは剣戟の演習だろう。

彼女の大きな咆哮と木刀を振るう音が室内から聞こえてくる。

実に素晴らしい響きだ。

彼女の咆哮が俺の鼓膜を突き抜け、脳が全力でワッショイしているのがわかる。

彼女の言葉の一字一句、一閃一斬が心地よく、俺を極上の樂園へと誘ってくれている。

これを極上の幸せと言わずしてなんと云うのか！！
とりあえずこれだけで今夜はゴハン十二杯余裕だな。

午後一二時四分七秒、昼食のため外出。

今日も本部の近所にある日本食屋さんだ。

あそこは外観こそ汚いが、中は小綺麗にしているし、味もいい。

お店をやっているのがおばちゃん一人という点も比較的高評価だな。しかしたえおばちゃんと言えども彼女の魅力にとりつかれたらが最期・・・・・・・・

・・・・・・・・まあこれ以上は言うまい。

午後一二時四二分三〇秒、昼食を終え、お店を出る。

今までに嗅いだことのない匂いが彼女を覆っている。

ご飯と味噌汁と漬け物までわかるが・・・・・・・・新メニューだろうか？今度また行ってみることにしよう。

あと彼女の使った食器類だけ洗わせてもらえないか交渉してみるか。

午後一時三分一秒。戦闘訓練再開。
サンドバッグを叩く鈍い音がする。ということは拳技の特訓か。
今日はいつになくキレとテンポに磨きがかかっているようだ。
昨日より体重が〇・五キロ、体脂肪率が一・一％落ちた効果だろうか。

特に腰回りの脂肪が減っていたから体重移動により加速がついたからに違いない。

彼女はなるべく体重も体脂肪も維持できるように努めているが、
平均値より若干落とすことでこれだけ効果があるのか。

うん、彼女の力はまだまだ伸びる。

そう確信出来るレベルだ。

世の中は実の幸福だな。彼女のような絶対の存在に守られているのだから。

かくいう俺もその一人だが。

午後六時五八分五二秒、帰宅。

帰りも男とすれ違わなくて何より。

今晚は昨日より寒くなるようだから風邪には十二分に注意して欲しいところだ。

今日のように事件が起こることがないよう祈りたい。

今宵も彼女の美しさに酔いしれて眠ろう。

ここまで一五分もかけずにざっと書き殴った杉彦は、椅子に座ったまま大きく仰け反って背伸びをした。

すると、天井に張ってある『彼女』の大きく引き伸ばして作った写真が目の止まり、杉彦は思わず顔がニヤけてしまう。

隙有杉彦、一六歳。

ただいま幸せの絶頂中。

なぜならば、杉彦が先ほどさんざん書き連ねた『彼女』の存在に
よるところが大きい。

以前、杉彦はその『彼女』に命を救われたことがあるのだ。

【2】主人公の出会い

これまで、杉彦は生きていて幸せを感じることがほとんどなかった。

女の子にモテることもなく、逆に誰かを好きになったこともない。ひたすら飯食って、学校行って、友達としゃべって、妹とケンカして、飯食って、寝て、という一連の動作を繰り返すだけの毎日を送っていた。

別段つまらなくもなく、特別楽しいこともなく、かといってそれがイヤなわけでもない。そんな生きること執着心のなかった杉彦は、知らぬ間に死神に目をつけられてしまっていたのだ。

約一年前の何でもないある日、学校帰りに偶然通りかかった道で、得体の知れない生き物と遭遇する。

その生き物は近くにあった銀行の中から壁をぶち抜いて現れたのだ。

それを不覚にも目撃してしまった杉彦は、一瞬何が起こったのかわからず、逃げまどう群衆の中で、体が硬直してしまう。

その生き物は頭が狼の頭部で、上半身が大きく筋骨隆々な人間の体に獣のような荒々しい毛を生やし、下半身はジーンズと靴を履いた人間の肢体というまさに異形な姿をしていた。

それを初めて目撃した杉彦はとてつもない違和感と殺気に支配され、一切動けなくなってしまった。

逃げ惑う街の人々をよそに、異常な外見をした生き物がゆっくりと杉彦に近づいてくる。

脳が必死にSOSを出しているのに、体は言うことを聞いてくれない。次々と消えていく人の気配がどんどん心を空にしていく。

（終わりだ。死ぬんだ）

杉彦は直感でそう思った。

（でもこんなつまらない人生で良かったのか？）

諦めと後悔が激しくぶつかりあい、体の震えが激しくなる。

唾液をだらだら垂らし、唸りながらゆっくりと近づいてきた獣もどきが、大きく手を上げ、杉彦に狙いを定めた。

終幕。

視界が暗くなり、体が倒れそうになった次の瞬間。

爽やかな風が杉彦の前を通り抜けた。

それと共に刀を持った一人の女性が獣もどきに向かって横合いから一閃を放った。

すると獣もどきの両足に一筋の線が入り、表面が切り開かれて血が吹き出た。

痛みを感じたのか、獣もどきが苦悶の咆哮を上げ、仰向けに倒れる。

刀を振った勢いで屈んでいた女性がゆっくりと立ち上がって、杉彦の方に体を向けてきた。

一瞬の神業を見せつけられた杉彦は、目の前に立っている女性をまざまざ見た。

まっすぐ綺麗に整えられた長い髪。

その表面は黄金のように輝く金色をしていた。

切れ長の目に、上質な宝石にも似たエメラルドブルー色の瞳が中に浮かんでいる。

鼻立ちも形と大きさが他の部分と絶妙はバランスを保っている。

口は小さくも力強い真一文字で、赤いルージュを薄く引いた唇が淡く艶めかしい。

武士のような和服が大和撫子を連想させ、その上から勇ましい西洋の鎧に似た胸当てや鉄甲、ひじ当てなどを装着している。

その全体が獣もどきの血で汚れてしまっているが、そこ以外の清潔感は完璧だ。

そして服装の上からでもわかってしまうほど、起伏に富んだ体型。ウエストの細さが胸とお尻の豊かさを見事にアシストしている。

その上、適度に筋肉のついた腕と、細い手先までが見事なバランスで成り立っている。

足も先までスツとまっすぐ伸びていて美しく長い。

身長一七〇センチの杉彦のお腹あたりにお尻があるくらいだ。

ものの三秒ほどしか彼女を見ていない杉彦に、ある一つの意志が心から初めて生まれた。

「好きだ」

思わず口から本音が出た。

杉彦はそれが自分の発した言葉だと最初は理解出来なかった。

今の今までわけもわからず命を奪われそうになっていたのに、こんな気持ちになるのがいけないことのようにさえ思えたのに。

なぜだかこう思わずにはいらなかった。

いや、自分は今心からお願しているのだ。

目の前に立っている女性が読んで字の如く、「宿った命」にふさわしい女性だと心の底から感じられたのだ。

体が硬直しつつも顔だけを感情のままに頬を赤く染め、ぐにやぐにやになっっている杉彦に、刀を納めたその女性がふいに声をかけた。

「・・・・大丈夫か？」

キイイイイイイイイイイと頭に大きな衝撃がきた。

声音はかき氷のように硬く冷たいが、その中からシロップのよう
なとろける甘みが染み出してきて、心が優しく包み込まれていく。

やられた。完全にやられた。

初めて出会ったとかいう常識など関係ない。

今すぐここで彼女と結婚しよう。

そう思い至った杉彦は早速それを彼女に伝えようとした。

「ああああああののののえええええええ
とととととととででですすすすねね
ねねねねねボガガガギギガガゴゴゴゴゴ

ダメだ。言葉にならない。

杉彦は人の口から出ているとも思えない奇声を発してしまう。

「？」

杉彦の異様さを見て、彼女が眉を細めて思う。

よほど怖い思いをしたのだろうか？

彼女はひとまず杉彦の体調を確認しようとそばに近寄ってきた。

彼女が一ミリ一ミリ近づくことに杉彦の体温が急速に上昇し始めた。

（イカン！！これはイカン！！！！！！）

炎は燃え尽きる手前で一段と激しく燃え上がるのだと、どこかで聞いたことを杉彦はこの時思い出した。

（そうか……俺はここで燃え尽きるのか……）

人生の終焉にしては良い終わり方だと杉彦は思った。

今までもろくに心を動かされることもなく生きてきた。

なのに命尽きる直前でこんな素晴らしい体験が出来たことは、間違いなく幸せなことなのだ。

それならば、恥も何もない。

例えここで死ぬことになっても、最期に自分の気持ちを彼女に伝えておくべきではないだろうか？

（……やるしかない……！！）

腹は決まった。

あとは言葉にするだけだ。

「あっ！！！！」

急に杉彦の奇声が大きくなって彼女はビクツとなり、思わず立ち止まってしまった。

ひとまず杉彦としては都合がいい。

これ以上近づかれると、本当に全身が沸騰して干上がってしまうかもしれない。杉彦は乱れる呼吸を整えるために一回大きく深呼吸をした。

（よっよっよっ、す、少しし落ち着つついたぞぞ）

次にカラツカラになった口の中を元に戻そうと懸命に舌を動かす。
(ふう……よし!!)

杉彦はついに「これならいけるぞ」という確信が持てた。

「あつ、あの!!!!」

先ほどから奇怪な行動を繰り返す杉彦を不思議そうな目で見る彼女に、今度こそとばかりに一段と大きい奇声を張り上げる杉彦。

ついにキョトンとしてしまった彼女の事などお構いなしに、杉彦はここで一気にたたみかけようとする。

「ぼぼぼ、ぼぼ、ぼくくくは、あああななっ たったのこっこつことつとがっがっが」

(あああと少こっこつしっしっし、だっだっだ!!!!!!)

「すすすすすすす」

ぶすつ。

「え」

それは唐突に起こった。

杉彦の首筋に何かが刺さったのだ。

思わず手を首筋に伸ばそうとした時、今の今まで暴れまくっていた心と体が一気に静まり、意識が飛んでしまった。

ゆっくりと後ろに倒れる杉彦。

最期の想いさえ届かず、無念のリタイア。 実にあっけない幕切れとなった。

すると杉彦が地面に倒れると同時に、杉彦の後ろに急に新たな女性が現れた。

目に痛いピンク色の長髪でところどころ三つ編みになっている。

上半身が濃い紫色の胸元が大きく開いた忍装束でかなり豊かな胸が強調されており、下半身にはスケバンのようなロングのプリーツスカートに身を包んでいる。更に足には網の荒いこれまた目に痛いピンクのタイツとハイヒールというなんとも異質なお色気丸出しの格好でのご登場だ。

体型も氷群よりふくよかでむちむちしている。その女性は真っ先

にキョトンとしていた女性を見定めると全力で抱きついてきた。

「んむうー氷群ちゃんひむれ！大丈夫だったア！？」

どうやら氷群ちゃんと呼ばれ抱きつかれた女性は、このお色気と認識があるようで、急な抱擁にも冷静な表情のままだった。

「伊賀嵐さんいがらし、どうしたのですか？」

「えーどうしたもこうしたもないわよー！今変な男が氷群ちゃんひむれを襲おうとしてたじゃない！」

襲う？氷群は疑問に思う。

彼は被害者だ。ここは誤解を解かねばならない。

「違いますよ。彼は被が」

「ねエー怖かったねエーもう大丈夫だからねエー」

氷群は懸命に杉彦を弁護しようとするが、伊賀嵐は聞く耳を持たない。

ぎゅーっと氷群に抱きつきながら、氷群の頭をぐしゃぐしゃと撫でつけ回している。

すっかりあきれてしまった氷群は、そこで異様な殺気を感じた。

先ほど両足の腱を斬ってもがいていたはずの獣もどきが立ち上がってきたのだ。

しこたま血が吹き荒れたにも関わらず、踏み込む足に力が宿っているし、殺気も増している。

獣もどきはまた荒い息を吐き、唾液を垂らして今度こそとばかりに氷群に向かって巨大な拳を放った。

だが、その拳は氷群を殴りつけることはなかった。

伊賀嵐に抱きつかれながらも、氷群はスツッと軽く右腕を後ろに回し、獣もどきの拳を受け止めた。

そのまま氷群は受け止めた拳を掴み、横合いに放った。獣もどきはいとも簡単に飛ばされ、コンビニの駐車場の壁に激突して、とうとう動かなくなった。

ボロボロに崩れた壁の方を見た伊賀嵐は、

「あらーア氷群ちゃん。ちよっとやりすぎなんじゃないのーオ？」

とあきれ顔。

「…………抱きつかれて身動きが取れなかったものですから」
氷群が反論すると、

「えゝエアタシのせいゝイゝ？言い訳なんて氷群ちゃんらしくないぞー」

という感じで伊賀嵐はあくまで無実を主張する。

「……………すいません」

これ以上は不毛だと判断した氷群は素直に謝罪した。

「そーそーオ！やっぱりヒムヒムは素直じゃなきゃねエゝ」

と変なあだ名をつけつつまた頭を撫でつけてくる伊賀嵐。

そこへ後ろから一台の大型トラックが走ってきた。

そのトラックは氷群たちの真後ろで止まると、その助手席から小柄な女の子が一人降りてきた。

青く肩までかかるくらいセミロングヘアーに赤い鉢巻、幼いが生真面目そうで端麗な顔立ちをしている。服装は上が黄色い柔道着で下がところどころ下から切り込みの入ったOLが履くような膝丈までのスカートというこれまたアンバランスな格好をしていた。

「氷群センパイ！！ご無事で……………って、なんで伊賀嵐さんもいるんすか！？」

「ナニよゝオゝアタシの仕事が終わっちゃったから氷群ちゃんを手伝ってあげよーと思って来たげたのオ」

伊賀嵐の反応に女の子は素直な怒りを示し、

「いくら任務が終わっても持ち場を離れないで下さいっす！」

「もオゝ飛鳥^{あすか}ちゃんはいつもオカタイんだからアゝ小姑みたいに小言言わないでよー」

飛鳥^{あすか}と呼ばれた女の子は恥ずかしさと怒りで頬を赤らめ、

「ボクは伊賀嵐さんより年下っす！！」

「わーかってるってーエ」

「それからいつまで氷群センパイに抱きついてるんすか！？」

などとすっかり漫才のように二人が言い合っている間に、トラッ

クの荷台から黒子の服を身にまとった性別不明の人間たちが15人ほど現れ、先ほど再起不能となった獣もどきを迅速にトラックへ積み込んだ。

二人のやりとりをあきれ顔で見ていた氷群だが、ふと何かを忘れていたのではと疑問が浮かんだ。

その疑問の元を確かめようと目線を伊賀嵐の後ろに向けようとした。

しかしそこに伊賀嵐が顔を突き出してきて、

「んーじゃあお仕事も無事終わったことだしイ、ヒムヒム帰ろー」
などと言ってくる。

「あ……はあ」

なぜか威圧のある表情の伊賀嵐に気圧され、氷群はそれ以上の追求をやめてしまった。

まあ先ほど伊賀嵐が彼に打ち込んだ針は、象も一発で眠らせられる麻酔針だから大丈夫だろうと適当に理由をつける。

「じゃあ氷群センパイ！帰って報告書をまとめましょう！」

飛鳥が氷群の手を掴んでひっぱる。

「やあーア！ヒムヒムはこれからアタシとお茶しに行くのー」

伊賀嵐もなぜか負けじと氷群の腕を自分の胸に押しつける。

「ダ・メ・っ・す！氷群さんのサポート役であるわたしが許さないっす！」

「んもーオー飛鳥ちゃんのいけずーウ」

「……」

無抵抗の氷群を引っ張り合いながら現場を後にする三人。

そしてすっかり放置プレイされる杉彦。

結局、騒動がひと段落しても通りがかかる人々は彼を気味悪がって起こしてくれず、目覚めた時には翌日の早朝になっていた。

【3】主人公の妹

椅子でのけぞったまま、杉彦は半年前のあの瞬間を思い出すだけで、インフルエンザにかかったかのように熱が上がり、全身が震え上がりそうになっていた。

しかし、あそこで告白していなかったことを今は逆に喜んだ。もし断られていたら間違いなく生き地獄だったに違いない。

それにあの素晴らしい感覚を味わいながら急速に眠気によって抑制されたことで、まるで出来立ての料理を瞬間冷凍して再び解凍したかのように、目覚めた時も感覚の鮮度が保てていたからだ。

今でも彼女の姿を見て思わずニヤニヤしてしまうのはそのせいだった。

そしてその後、杉彦は『彼女』のことを徹底的に調べ上げた。

『彼女』の名前は氷群・ハイリツヒシユタイン。年齢は現在一九歳。身長・体重・血液型は無論、杉彦は知っているが彼女の為に非公表だそう。

どうやら氷群の父親はドイツ人で、母親は日本人といういわば「ハーフ」らしい。

幼少の頃はドイツで過ごし、地元では空手や剣道など、数ある日本の武術の鍛錬を次々と積み上げ、世界選手権の候補生にも選ばれていたようだ。

ところが、彼女が一六歳の時、日本で獣のような姿をした凶悪な犯罪者が続々と現れるようになり、日本政府はより実戦力に長けた人間を求めている。

そこで『シルヴァー・ハント』という獣もどきによる犯罪を沈静化するために創られた、新たな私設組織の要請を受けた氷群は、母の母国である日本に来ることになったのだ。

それから実際の彼女の働きだが、本来持ち合わせていた彼女の格闘センスは抜群で、次々と凶暴な犯罪者を捕獲。来日してからこれ

まで解決できなかった事件はない。

今や彼女の活躍は世間からも注目を集め、あちこちでちょっとした話題になっていくくらいだ。

あの唐突すぎる出逢いは氷群がその『シルヴァー・ハント』に所属する正式な戦闘員^{ハンター}だったからというのが大きいの。

今までは杉彦の周りでそうした獣もどきによる犯罪が起きていなかったため、氷群に出逢う機会もなかった。

たまたまあの現場に居合わせ、しかもそこへ氷群が駆けつけたことは、まさに運命、宿命と言って差し支えないだろう。

相変わらずニヤニヤの止まらない杉彦だったが、明日もまた氷群に（一方的に）会うことを考えてひとまず寝ようと椅子から立ち上がる。

そこへまったく気配も音もない状態から、急に杉彦の部屋のドアが勢いよく開かれた。

ドアの向こうには大きく肩で息をしているツインテールで幼女性型の女の子が、ただならぬオーラをまとって仁王立ちしていた。

彼女の第一声。

「きいもおおおあああにいいいいいい！！！！」

突然ドアが開いて大声で罵声を浴びた杉彦は、さすがに驚きを隠せない。

「なっっ！いきなりドアを開けるやつがいるか！ノックをしろノック！」

「うっさいわねえ！！兄貴に他人の礼儀を注意できる権利なんてあるワケ！？」

「あ、兄が妹に説教して何がおかしいんだよ！」

「あああもおおうっざいわ！！そんなことより兄貴また学校来なかったでしょ！！！！なんで兄妹っただけで私が怒られなきゃなんないのよ！？」

「あれ、おつかしーなあ？ちゃんと変わり身を置いといたのに」

「あんな木に顔書いて制服かけただけのやつに誰かダメされるわけ

ないでしょ!!」

「マジか!!じゃあ次の手を考えないと・・・・・・・・」

「うゝゝぶあああかああ!!!!」

すっかり兄妹ゲンカに花が咲いてしまった。

杉彦の妹、すきありひろみ隙有広美。年齢は杉彦の一つ下の一五歳で、まったくもって普通の女子高生だ。

唯一他の女子高生と違う点は、この兄貴がいることだ。つい一年前までは兄貴も普通の高校生だった。

なのに、兄貴は氷群と出会って以来、高校にほとんど来なくなっ

た。ほぼ毎日、氷群の”追っかけ”にお熱だったのだ。

そんな兄貴に対して、最近広美は苛立ちを隠せないでいた。

もともとダサイメガネをかけていて、更に髪はボッサボサ。私服もダッサダサ。体型は中肉中背で、普通。良い点など挙げようがなかった。

こんなのが自分の兄だと認めたくなかった。全世界の人類に心から申し上げたい。こいつとは無関係だぞ、と。

「もゝゝそんなに学校行くのがいや・・・・・・・・・・いいいい!!?」

広美のグチが奇声と共に止まった。

どうやら杉彦の部屋を見渡しての言動らしい。

兄貴が疑問を投げかける。

「ん?どうした?虫でもいたか?」

「ちっ、ちがつ!ていうか、なんなのこの部屋!?」

「はあ、何って言われても・・・・・・・・・・見ての通りだ」

「説明になってないわよ!!」

広美の驚きの要因は、杉彦の部屋を埋め尽くしている『ある人物』に関する諸々だ。

壁一面を多い尽くす大量の写真。

本棚にも写真が収まっているファイルが大量にあり、写真がプリントアウトしてるカップやタオル、シャープペンシル等々のステー

シヨナリー、生活グッズが充実に取り揃えている。

もうお気づきの方もいると思うが、これらの写真に収まっている『ある人物』とは氷群・ハイリツヒシュタイン、その人である。

かれこれ半年、彼女の”追っかけ”を遂行してきた杉彦の汗と涙の結晶とも言える。

しばし広美は、この状況を理解するのに苦労していた。

そもそも兄貴が不登校になった理由を、広美は知らなかったのだ。もともと仲が良かったわけでもないのに、家ではご飯食べる時や廊下で出くわす時くらいしか顔を合わさないし、大して会話もない。今日は学校で杉彦の不登校について杉彦の担任からなぜか広美に説教が飛び、何年かぶりに兄貴の部屋の扉を開けたという経緯だ。

広美は何とかやつとの思いで次の疑問を兄貴に投げかけた。

「こ、これって、あの氷群・ハイリツヒシュタイン様でしょ!？」

どうやら広美も氷群の存在は知っているようだ。

「おう、そうそう」

それに対し、杉彦は実に軽い感じで応じた。

「なんで写真がこんなに!？誰が撮ったの!？売ってるの!？兄貴が買ったの!？なんで写真がこんなに!？てかなんなの!？」

明らかに頭が整理できてない広美。

「そんなにいつぺんに訊かれてもな。まずこれは俺が全部撮ったやつだ。すごいだろ!？」

ドヤ顔の杉彦。

しかし妹としてはとてつもない返答に目を丸くする。

「・・・・・・へ？兄貴が？」

「だからそうだって」

「はあ!？何それ!？じゃあ何!？いつも学校来ないで氷群様の写真撮ってたってこと!？」

「ん、正確に言うとは違うが、似たようなものかな」

「そっ、それってさあ、まずくない!？兄貴ストーリーカーしてんの!？」

「失礼だな。そんな悪質な行いじゃないよ。俺は彼女に敬意を表し、彼女の行動を逐一観察して」

「それがストーカーだって言ってるのよ!？」

「そうかあ?んゝ考えが一致しないな」

「一致するか!！」

兄妹ゲンカが更に咲き乱れてしまったようだ。

困った杉彦だったが、広美の怒り方がいつもと微妙に違うような感じを受けた。

そこにピンときた杉彦は、たった今思いついた提案を広美に投げかけてみる。

「じゃあこうしよう!お前も氷群様っていうくらいだから彼女のことが好きだったりするんだろ？」

「え……い、いやまあその……」

広美は何故か急に頬を赤らめた。

これは脈アリか!と杉彦はここぞばかりにたたみかけようとする。

「もしそうなら、特別に撮れ立てホヤホヤの写真を一枚やろう。それでひとまず勘弁な!」

「なっ……!そ、そんなストーカーして撮った写真なんて私はほ」

「ほれ」

杉彦は机の上にあった一枚の写真を広美に差し出した。

どうやら昼食を終え、無表情ながらも若干満足げな顔になっている氷群が写っている。

望遠からの撮影にも関わらず、かなり解像度が高い。

広美は差し出された写真を一度ガン見して、

「ふん!」

とそっぽを向いて今度はチラ見する。

キュピーン!これは好感触だと杉彦は確信した。

「さあ……どうする?」

迫られる広美。

「べ、別にいらないけど……」

「そ、じゃあしょうがな」

「兄貴がいらないんならもらってあげてもいいけど!？」
「かかった!！」

「じゃあこれでチャラってことで頼む!な!」

「はは、仕方ないわね」

広美はそっぽを向きつつ口だけニヤけながら差し出された写真を
受け取る。

「つーかその代わりちゃんと学校行きなよ!？」

「うん、わかったー」

わかりやすい棒読み返事だったが、広美は大して気に止めなかつた。

「じゃあ、おやすみ」

「おう」

広美は平静を装いなんでもなかったかのように杉彦の部屋を出る。
ドアがしまった瞬間。

「きゃあああああ氷群さまあああああああ!!!」

ドアの向こうから得も言われぬ奇声と共にドタドタと廊下を
走る声が聞こえてきた。

兄貴・杉彦は思う。やっぱり兄妹は兄妹なのだ。でもこうも思
う。爽やかに思う。でも同性相手は良くないぞ、と。

【4】主人公の遭遇

あれから更に半年。

今日も今日とて隙有杉彦は、氷群・ハイリツヒシユタインの”追っかけ”として、彼女の動向を観察していた。

半年前のあの日、妹に自分の行動の実体を知られてしまったのは失態だったが、そこをうまく切り抜け、更にうまく学校で出席している風を装う術も身につけることに成功して、今に至る。

（まあ別に後ろめたいこととは思ってないんだけどね）

学校を休むのだって、インフルエンザにかかっているみたいな状態だと言い張っている。妹もあれ以来、自分を弁明してくれているようだ。

杉彦自信に言わせれば、自分の行動は全て健全の範囲内だ。

この追っかけ行為にしたって、例えば彼女に何度も電話をかけ、「へへへ、パンツ何色？へへへ」と訊くわけでもなく、着替えや入浴を覗くわけでもなく、それこそ部屋に盗聴器やカメラを取り付けることもなく、ただひたすら彼女を見守り続けているに過ぎないと基準としては、彼女の嫌がりそうなことはしない。したくない。

一度だけでも自らの命を助けてくれたという恩義を返すという意味で、彼女の行動を知り、いかなる時でも「彼女の助けになりたい！」くらいの気持ちで、杉彦は臨んでいるのだ。

彼の信念に揺るぎはない。

杉彦はこれまで生きてきて、ここまで本気になれることなどなかった。

その反動こそが今の彼を動かしていることに他ならない。

ただ、そこにどうしてもつきまとう感情があるのも確かだった。

「……………ん」告白するなら今のタイミングかな？いや、でもな」

そう。杉彦の唯一煮えきらない想い。

彼女を「好き」という気持ちだ。

これは「出逢い」であり、杉彦の「初恋」でもあった。いわゆる一目惚れというやつだが、特の杉彦の場合は、そのシチュエーションが鮮烈過ぎたのだ……。

午後五時一四分〇秒。今日は街外れの国道沿いにあるガソリンスタンドに押し入った強盗が、獣もどきになり暴れ出した。

そこへ氷群が駆けつけ、あっさり秒殺。

あまりにも鮮やか過ぎる仕留め方に、杉彦は思わず鼻血が出そうになったくらいだ。（つか出た）

そしていつものように組織のスタッフと思わしき黒子たちが事件後の処理をしていた。

「氷群センパイ！処理も終わりましたし、帰還しましよっす！」

またいつものように、氷群のサポート役である活発明朗な飛鳥が氷群に声をかけてくる。

「……………」

それに対して氷群はなぜか反応しない。

「氷群センパイ？どうかしたんすか？」

質問を提示する飛鳥。

「……………すまない。先に帰還してくれ」

「えっ？なんでっすか!？」

「ちよつとな……………」

氷群が何故か言い淀んだ。

その意図を察知したのか、飛鳥が納得したようで、

「あ、はい！わかりましたっす！では帰りお気をつけて！」

「ああ……………」

飛鳥は颯爽とトラックに乗り込み、スタッフ共々現場を後にした。一人で取り残された氷群は、ガソリンスタンドの奥に歩いて行くとする。

そこを近くの山林からそつとのぞく杉彦。
かれこれ1年ちよい。

何度告白しようかと悩んだことか。

しかしなかなかタイミングを掴めず、やきもきしながら結局1年が過ぎてしまった。

しかし、今日はめずらしく彼女が一人きりで、しかも不自然ではないシチュエーションが来たと杉彦は確信した。

「・・・・・・よし！今こそ！！」

心臓のバクバク音に押される形で、杉彦は山林から抜け出そうとした。

するとそこへ、

「ちよいとお待ちをダンナ！！」

という声が聞こえてきた。

急に声をかけられ、さすがに驚く杉彦。

地面に足を引っかけて壮大にコケてしまった。

「痛つつつっ！！な、だ、誰だよ一体・・・・・・」

杉彦は痛みに堪えてなんとか立ち上がり、周りを見渡す。人の姿が全く見当たらない。

空耳か？杉彦がそう思った時、

「ここ！ここでさあダンナ！」

また声が聞こえる。

杉彦は気味が悪くなったが、おそろおそろ声をする下の方に顔を向けてみた。

そして驚愕した。

「そうそう、あつしですよダンナ！」

どうしたことだろうか？

声の主はタヌキだった。

「たっ・・・・・・たっ！たっ！」

タヌキがしゃべってる！杉彦はそう言いたかったが、驚きのあまり声が出ない。

それもそうだ。「タヌキは人の言葉を話さない」というのが人類の共通した常識だからだ。

しかし、呆然としてしまった杉彦の耳に、容赦なくタヌキのしゃべり声が響いて来る。

「やつと声かけられましたよダンナー！いやーいつもいつも見事な情愛っぷりで、見ててホレボレしちゃいやすよダンナー！でもねえダンナー！いい加減そろそろ花あ咲かせなきゃ男が廃るってえーもんでさあダンナー！」

（え、やつと？ダンナ？男が廃る？）

全体の言語は実に流暢な日本語でわかりやすいが、ところどころわけのわからないことを言っている。ついでに口調も若干変。

このまま逃げてしまいたい杉彦だったが、疑問を感じる点がある。と何故かそれを説明しなくなった。

どことなく『彼女』に興味をもった時の感覚にも似ていると杉彦は思った。

荒い息を吐いて少し落ち着いた杉彦は、なんとか言葉を絞り出してみる。

「ああああ、あえーつと、さあ。………なんなの？」

「へ？なんなのと申しますと？」

「いやあ………なんかいろいろさつ。おかしいじゃない。きつキミはタ、タヌキでいいの？」

杉彦はとりあえず一つ目の疑問を口にする。

「タヌキ？あーはいはい。そうでござんす！あつしはタヌキの【ぴよん太】ってモンでさあ！」

「ぴよ、ぴよんキチ？」

「ちげーますあダンナー！ぴよん太ですぜダンナー！」

わからない。

タヌキは当たりらしいがどうにも腑に落ちない。

とりあえずこつちの言葉はわかるようで、会話は成立するようだ。少し安心した杉彦は次の質問を試してみる。

「………で、ダンナとか、ずっと見てたとかってさあ………
………」

「そいつあですねダンナ。ダンナがあのお嬢さんに声をかけたそうにしてたのをずっと見守らせてもらっていたんでさあ」

「見守る？」

「ええ、かれこれ１年になりやすねえ、ダンナ」

「１年！？」

「ということは、杉彦が氷群と出会って追っかけを初めてからずっと、ということになる。」

「え……それじゃああの時から今の今までずっと俺の近くにいたってこと！？」

「そういうことでさあダンナ！」

驚愕？そんなレベルではない。

実に奇怪なことに、氷群をずっと見守って（もとい追いかけて回して）いた自分が、逆に追いかけて回されている立場にあったとは……
……しかもタヌキに。しゃべるタヌキに。

もうどうリアクションしてよいかわからず、膝を折り、手をつく杉彦。もはやショックを通り越して風化しそうになっている杉彦をよそに、タヌキをまたしゃべり出した。

「それでですねえダンナ！そんないつまでも惚れた女の尻ばっか追っかけてねえで、さつさと恋の花を咲かせましょうぜ！ってことでさあダンナ」

「……ふっ」

あろうことが、変なタヌキに説教までされるとは……。働き過ぎる違和感を帰宅させることが出来ない杉彦は、心の底からやむなしと思い、この状況を受け入れようと決意した。

「で……しゃべる素敵なタヌキさんは俺にどうしろと？」

「ぴよん太でさあダンナ！ぜひあつしにこの恋を成就させる手伝いをさせてくださいえダンナ！」

どうしよう、本気で逃げたい。

ここまで受け入れるのは万歩ぐらい譲るとしても、恋愛成就の指南をタヌキに頼むだあ！？違和感さつさと帰れ！！と杉彦は率直に

怒りを沸騰させた。

「まあ冷静になってくんねえダンナ。考えてもみてくだせえよ。このまんまダンナの想いが届かなかったらどうなると思います？あのお嬢さんだっていっぱいのおなご。いずれどこぞの輩の下に嫁がなきゃならねえ」

ビクツツと杉彦が反射的に体を震わせた。

「嫁ぐ」という言葉が足の小指に思い切り直撃したような感覚に襲われた。

「ダンナだっていつかはカミさんもらって、子どもの一人も産まにやならねえ時もありますあ。そんな時分になってまでまだこんなことを続けられるたあ思えませんぜダンナ」

おいおい、ちよつと待ってくれよ。杉彦は震撼した。

こいつ、ものすごいまともなこと言ってるぞ。タヌキのくせに。

「ここは江戸っ子らしく、とつとケリをつけた方が“漢”ってもんですぜダンナ」

むかつ腹がなかなか収まらない杉彦だったが、このタヌキの言い分はとても正しい。

その正しさが杉彦の神経を逆なでしているわけだが……。そもそも杉彦はそんな先のことなどまだ考えてもいなかった。

杉彦はまだ高校生だ。

結婚など大人になってからのことだし、それ以前に恋愛さえまともにしたことがない。

確かに杉彦は彼女のことを本気で好きだ。だからこそ「万が一」のことを考えてしまうと、体が思うとおりに動いてくれなくなる。

彼女を失うことの恐怖の大きさと、彼女への好意の大きさが比例している。

杉彦にとって、今の氷群との距離感が実に心地よく、絶妙なのだ。氷群がどれだけ素晴らしい女性かわかっているからこそ、逆に何も持ち合わせていない自分が釣り合うのかと常々悩んできた。

そしてこの悩みは自分をどうにかしない限り、解決しないだろう。ならばこのタヌキの言うことが現実味を帯びてくるのも時間の問題かもしれない。めずらしく、杉彦は冷静にまともなことを考えた。タヌキがしゃべるといいう限りなく幻想に近い事実を突きつけられたことで、脳も体も立ち止まるきっかけになった。

いつもならば一分一秒を氷群のことに意識を向けているところだ。初めて自分のことを客観視する機会を得て、杉彦はなんとなく無駄な力が抜けた気がした。

「……………ここまでではわかったぞ。で、恋を成就させるための手伝いつて、一体なにしてくれるんだ？」

「お、納得してただけましたかダンナ！」

「かなりムリヤリだけどね……………」

杉彦は頭に手を当てて若干来る脳の痛みを抑えようとした。

「そうと決まりやあ話がはええやダンナ！まざあのお嬢さんにぶっつけで告白するところから始めましょうぜダンナ！」

「つていきなりかよー！」

杉彦はあきれかえる。

まあそもそもさつき彼女が一人になった時に告白しようとしてて……………

告白しようとしてて？

「ああああああっ！！！」

急に奇声を上げ出した杉彦。

「どうしましたあ？ダンナ」

「そうだよそうなんだよ！！俺今彼女に告白しようとしてたんだよ！！！」

すっかり忘れていた。

いくらししゃべるタヌキに遭遇したからといって、少しでも彼女から意識が遠のくとはなんたることか。

杉彦は急いで山林から出てガソリンスタンドに猛ダッシュした。そのスピードたるやトップアスリートの比ではなかった。

杉彦は半壊したガソリンスタンドの周りを見渡した。

「いついない！！氷群さんがいない！！どこにもいないいいいいいいいい！！」

どうやら氷群はすでに帰還したあとのようだ。

「あんれまあゝ。ご愁傷様ですダンナー」

あとからノコノコついてきたしゃべるタヌキことぴよん太は伸びきった声で杉彦を哀れんだ。

「お、お前のせいだろうがああああああ！！」

先ほどの怒りがまた再沸騰してしまったようだ。

しかし、ここは怒りに任せている場合ではない。

一刻も早く彼女を追いかねば。

杉彦は耳と鼻に神経を集中させ、彼女が向かった方向を察知すると、また突風の如く神がかったスピードで彼女のところへ向かった。

「うおおおおおおおお！！」

「ちよちよちよちよつとダンナ！お待ちになつて！！」

ぴよん太も負けじと走ったがまあ追いつくはずもない。

こうして今日も平和に日が暮れていったのだった。

ちなみにそれから三〇秒後、半壊したガソリンスタンドから水の流れる音がしたことに、誰も気付くことはなかった。

【5】主人公の？

月明かりのまぶしい夜。それもそのはず。この時代には電気がない。夜の明かりといえば月と、星と、灯籠と、蛍くらいなものだ。

ここは杉彦のいる時代から約一二〇年前の時代。

刀を振るって、敵国や妖怪を倒す武士が人の世の上に立つ、そんな時代。

將軍様の城下町から山を一つ、二つと越えた山奥にある武稽古場に、彼はいた。

彼の名は『幾久^{いくひさ}』。

若干、十二歳にして大人と剣の腕を並べられるくらいの少年だ。

その上、非常に剣術に熱心で真面目な少年であり、今日も丑三つ時にも関わらず、無心に木刀を降り続けていた。

将来、立派な武士になり、將軍様のお側に使えることが彼の夢だからだ。

「はっ！はっ！はっ！はっ！はっ！はっ！はっ！はっ！はっ！はっ！」

木刀を振るうと共に、気迫のある言霊を発する幾久。

一系乱れぬ素振りの音と言の葉は、月の満ちた静かな夜に力強く響き渡る。

「はっ！はっ！は、・・・・・・・・ん？」

幾久は急に動きを止めた。稽古場の外で物音がしたからだ。

・・・・・・・・あやかしだろうか？

幾久が廊下に出てみると、月明かりでうつすらとしか見えないが、誰かが倒れているのがわかる。その人物から小さいうめき声が聞こえてきた。

「うう・・・・・・・・いたたあ・・・・・・・・ふあ」

その声の主は幾久が来たことに気づくと、幾久に顔を向けて照れた笑みを浮かべた。

「あ、幾ちゃん、御免ね。お稽古の邪魔しちゃって」

その声の主を、幾久は知っていた。

「・・・・・・・・またか、陽黄^{（やうわう）}」

陽黄^{（やうわう）}と呼ばれた女の子は、にっこりと笑い、

「えへへへゝ厠の帰りに幾ちゃんの声が聞こえたから」

舌を出しておどけてみせた。どうやら廊下から落ちて転んでしまったらしい。

「まったく仕方ないやつだ。お前はよく転ぶ。暗がりでは通った道以外は通るな」

厳格な態度だが、語気を弱めて陽黄を諭そうとする幾久。

「う、うん、そうだよ。御免ね、幾ちゃん」

陽黄は少しシュンとなった。反省しているつもりなのだろう。その表情にはいつも勝てない幾久は、ため息混じりで、

「・・・・・・・・次からは気をつけろよ」

「うん！」

陽黄にまた明るさが戻る。

「じゃあ寝室までついていってやる」

「うん！有り難う幾ちゃん！」

幾久は廊下から手を伸ばし、陽黄の手を取る。

陽黄が廊下になると、幾久はゆっくりと陽黄をひっぱって廊下を歩いた。

なかばつまづくように歩き出して、陽黄の髪がサラっとなびく。

長く綺麗な黒髪が月明かりに照らされ、美しい黄金色に輝く。

陽黄は幾久の幼なじみで、年も同じ十二歳だ。陽黄はこの稽古場の師範代の娘であり、幾久の想い人でもある。

想い人と言ってもまだ幼少であり大げさだが、幾久にとっては彼女が初恋の相手であり、大切な唯一無二の女性なのだ。

師範代の娘であるにも関わらず、ドジで間抜けで天然。剣の腕前もよろしくない。

だが、幾久のことを家族のように慕い、どこに行くにもちょこちよこついてくる。

そしてなんといても、陽黄の髪はきらびやかで美しかった。

特に自然光に当たると財宝の如くキラキラと黄金色に輝くのだ。

原因は不明だが、陽黄を知っている一部の人間だけが目撃している。周りからとても寵愛されている。

今はまだ噂でとどまっているが、いずれ陽黄の髪の話が將軍様の耳まで届くことだろう。

それまでに彼女を守る強さを身につけておくことが、幾久のもう一つの目標でもあった。

陽黄を寝室まで送ったら、続きをしよう。

幾久はいつも以上に気合いをいれて、稽古を続けた。

【6】主人公の対話

時代は戻って現代。

結局、あの後杉彦が氷群に追いついた時には、既に彼女が帰宅してしまつた後だった。

仕方なく杉彦は氷群が就寝するまで見守り続け、泣く泣く帰宅することとなった。

「あああ……また告白出来なかったなあ……」
今回は本気でへこむ杉彦。

泣きながら自室の机にのべえーとつつぷした。

「………ったく、なんだったんだよアイツ……」
また沸々と怒りがこみ上げてきた。

一体あのぴょん太とかいうしゃべるタヌキはなんだったのか？

氷群を追いかける杉彦のスピードについてこれず、昨日はあれでお別れとなった。

というか、あれは夢だったんじゃないのか？

杉彦は自分があまりにも恋に溺れすぎて、他のことに盲目だった分、その反動でおかしな夢を見たのかと思った。

まあありえない話ではないだろう。ならばこれを機に少し冷静になつてみるのも悪くないかもしれないと、杉彦は肝に銘じてみる。

とりあえず今日の日誌を書いて寝ることにした。

そして翌日。

ぴょん太は再び杉彦の前に現れた。

いつものように氷群の朝起きる時間を見計らつて家を出るのだが、玄関の扉を開けた目の前にコイツはいた。

さすがの杉彦もこれは予想外で、昨日のように盛大にコケた。

それを普通にスルーするぴょん太。

「おはようござえますあダンナ！今日は絶好の告白日和ですねえダ

ンナ」

やけにゴキゲンなぴよん太と対照的に、杉彦は倒れながら怒りに震えていた。

「なっつ、なんでウチがつ！、……………わかつたんつ、だ！」

「へへえ、一応あつしも動物の端くれですしねえ……………いわゆる動物のカンてやつでさあダンナ」

ドヤ顔のぴよん太。

杉彦の心境はいかばかりか。

「ふ・ざ・け・る・な」

「やージヨークでさあダンナ！タヌキジヨーク！実はダンナの匂いを辿って来たんでさあダンナ！」

……………なるほど。

あくまで普通の動物のタヌキだと言い張りたいわけか。

杉彦はなんとなく、これは夢じゃないと確信できたような気がした。だが確信できたからといって、どうにかなるわけではない。

まずはこの幻想を受け入れ、対処しなくてはならない。

「……………で、昨日の話だと、まず俺がぶつつけで氷群さんに告白しろと」

「へへえダンナ、その通りでさあ！」

「なんでいきなり告白からなの？」

杉彦は率直に質問した。

「まずあ今のダンナの現状つてもんを把握しなきゃなりやせん。その上でダンナのどこがわりいのか改めて判断させてもらいやすぜ！」
ふむ、実にまともだ。

とてもタヌキの発想とは思えない。

「ぴよん太ですぜダンナ！」

「心を読むな！」

杉彦は思わずつつこんでしまった。

いかん、こいつのペースに巻き込まれるな。

いくらまともな意見でも所詮は狸畜生の言葉。早々に受け入れて

はいけない。

杉彦はため息を挟んで次の質問をする。

「それで、うまくいかなかったらどうするんだよ？」

「そこはおまかせくだせえダンナ！あつしの知識を総動員して、ダンナにふさわしい恋愛成就法を伝授しますぜ！」

伝授ときたよライ。恋愛成就法で……。もはやセールスマンの常套句みたいじゃないか。

この一帯を胡散臭さが充満しまくっている。ちよつとふらつく杉彦。

「……………今更だけどさあ」

「なんでさあダンナ？」

「なんでタヌキのお前が人間の恋愛に口出しするんだよ？ていうかタヌキが人間の恋愛に詳しいっておかしいだろ！？」

というよりもう全てがおかしいのだが、杉彦にしてみれば、ある程度幻想を受け入れたという前提での問い詰めだった。

「ふっふっん、それはですねダンナ。あつしはこれまで、数十年もの間、数多の人間の恋を成就させてきた人間恋愛の達人だからさあダンナ！」

「……………は？」

またかなりぶつとんだ設定が明らかになり、アゴがはずれそうになる杉彦。

達「人」はおかしいだろ！達「狸」だろ！というつつこみは置いておき、数十年も人間の恋を成就させてきたというのはどういうことなのか。

「それって何？お前結構いい年ってこと？」

「そうですねダンナ！かれこれ100年以上は生きてますぜダンナ！」

……………そういうことか。杉彦はなんとなく事情を理解し始めた。

というより一方的な解釈に過ぎないが。このタヌキがしゃべるの

はきつと100年生きて妖怪かなんかになったからだろうと思われる。

そういう解釈なら仕方ないと思えなくもない。

しかし、もう一つの疑問が解決していない。

「……まあ年はいいとして、なんで人間の恋愛を成就させてきたのさ？そういう神様かなんかの？」

杉彦は成就という点に関して言えばこいつが「神様」という解釈も間違っていない気がした。

「あーそいつあーですねダンナあ……んー……」
なぜか言いにくそうにするぴよん太。

「……聞いて驚かねえで下さいよダンナ」
なんだなんだおい。

今更驚くも何もないぞと杉彦は気張ってみせた。

「じゃあお話しますがねダンナ………実はあつし………」

「
妙な緊張感を漂わせるぴよん太に、杉彦は思わずゴクリッと生唾を飲んだ。

そしてぴよん太から発せられた言葉は実に衝撃的だった。

「………ただの元・人間ですぜダンナ」

「………へ？」

ただの元・人間？どういうこった？

「ままつ、種明かしも済ましたとこで、早速お嬢さんに告白しに行きやしょうぜダンナ！」

「え、あつあつ！おい！！」

きびすを返して走り出すぴよん太。

もうまた意味不明なことが沸いてきたと正直うんざりな杉彦だったが、やはり氷群のことも気になるので、とりあえずぴよん太を追うことにした。

今日も平和な一日を迎える。

【7】主人公の挑戦

杉彦はなんとか氷群が出勤する前に、彼女の家までたどり着いた。同じく、一緒に来たぴょん太におそろおそろ確認する。

「・・・・・・なあ、すぐ告白しなきゃダメ？」

「無論でさあダンナ！せっかくお嬢さんがお一人の時なんですから」「そうだけどさ・・・・・・」

杉彦がぶつくさ言っている時に、氷群が玄関から出てきた。杉彦の脳内メモリーでは今日は予定時刻ぴったりの出社だ。

「ささっ！ガッツつかましてきて下せえダンナ！」

「うっ、え、ええい！こうなりややけだ！！」

杉彦は思い切り飛び出して、氷群の目の前に立ちはだかった。

急に人が目の前に現れ、氷群は目を丸くする。

彼女の前に立ったとたん、杉彦の心臓は爆音を轟かせた。

全身の血液がグググツツいい、脳みその回転がおかしい。目も焦点が合わず、彼女の顔をまともに見れない。

しかし、わざわざこのタイミングで出てきたのだ。

今この時を逃す手はない。

「いけー！ダンナ！ぶつとばせダンナ！」

何か間違っている声援が後ろから飛んでくるが、今の杉彦はそれを気にしている余裕はない。

目を丸くしていた氷群の表情が曇りかける。そりゃ急に変な男が目の前に現れたのだ。違和感を持つ方が正常だ。

そんな微妙な彼女の変化に気づいたのか、杉彦は少し冷静さを取り戻した。

「いかん！このままだとまずい！今だ！今しかない！
そう自らを奮い立たせ、全神経を口と喉に集中させて、言葉を発しようとする。

「あああああっあっ、ああああのおおおっ、お、えっとおおで

すえー！！」

いつもより若干滑舌が良い。

イケル！イケルゾ！と脳内アドレナリンを調節して、さらに言葉を続ける杉彦。

「ひひひひひむっひむっ氷群さん！！」

急に名前を呼ばれ、曇りそうだった表情から驚きの表情に変わる氷群。

「あ、はい」

氷群はなんとも素っ頓狂な声を出した。

なんでこいつは自分の名前を知っているのだろうという違和感が多少あるが、とりあえず名前を呼ばれたからには返事をするというのが、生真面目な氷群の性格だった。

普通に返事を返してくれた氷群に多大なる感謝の意を表しつつ、杉彦は更に言葉を続ける。

「おおおおっ俺えっえっ、まままっまえか、ひひひ氷群さんがっがっ、だいだいだいだい」

しまった！！と杉彦は失念した。

単純に「好き」と伝えればいいものを、「大好き」と言おうとしてしまったことで、その後の言葉に詰まってしまったので。

なんとというアホかと、杉彦は後悔したが、とにかく今は次を言うしかない。

「だいつだいつだいいすっすっ」

もう少し！もう少しだ！

全身に力を込め、最後の言葉を発しようとする杉彦。

そこへとんでもない事件が起こった。

「なああああん！！」

「こらあああああ！！待ちなさああああい！！！！」

今、杉彦と氷群がいるのは、普通の住宅街にある一車線の道路。そこへ焼き魚をくわえた猫と、エプロンをしておたまを持った裸足の主婦が走ってきたのだ。

猛スピードで駆けてくる両者は、周りなど全く気にしている様子はない。

猫はブロック塀に登るべく、杉彦の頭を踏み台にした。

そのままうつ伏せに倒れそうになった杉彦に続いて主婦が、杉彦の頭を踏み台にし、二者はブロック塀をつたって追いかけてつこを継続していった。

おもいつきり踏まれて顔面を強打した杉彦は、そのまま動かなくなってしまう。すっかり何が起こったのか理解できない氷群は、そのまま硬直した。

そこへぴょん太が急いで駆けつけ、杉彦の足を噛んで引っ張り、この場を退いた。

かくして、衝撃映像の現場に氷群だけが取り残されたのだった。

「ほら、起きてくだせえダンナ！」

ペシペシとぴょん太は杉彦の頬をはった。

「……んん、んーん」

「お、気づきやしたねダンナ！」

ゆっくりと起き上がる杉彦。

頭の後ろと顔に痛みがあるが、その理由がわからない。

「あれ？俺、今氷群さんに告白しようとしてたんじゃ」

「それが……カクカクシカジカでしてねえダンナ」

「ううっ、そつかあ……またかあ……」

顔と頭の痛みを押さえつつ、杉彦は顔を伏せる。

またうまくいかなかった。いつもこうなのだ。

実はかれこれ何度も氷群に告白しようとしたことはあったのだ。

しかし、彼女の前に立つと、心身共におかしくなり、すぐに告白出来ない。

そこへどこからともなく変な現象がそのわずかな隙をつき、杉彦の告白を邪魔するので、結局失敗に終わるのが常だった。

前回は駅前で告白しようとして、何故か街頭アンケートを求める

女性たちが氷群に群がってきたり、前々回なんか相撲部屋の近くで告白しようとして、何故か杉彦の上におすもうさんが落っこつてきたり、前々前回なんかファンシーシヨップの前でいきなり『スキあり妖精』（油断している人間を見つけては「スキあり！」といって体当たりを仕掛けてくる、今幼女の間で大人気のアニメキャラクタ―）が飛んできて杉彦をふっ飛ばしたり、散々だった。

まるで神様が悪魔が杉彦の恋を妨害しているとしか、杉彦には思えなかった。

度重なる失敗は、さすがの杉彦にも、彼女に告白することへの抵抗を生ませるのに十分だった。

体の痛み以上に、心が痛い杉彦に対して、なんの哀れみもなく、ぴょん太は明るく声をかけてくる。

「ところがどっこいダンナ！これでダンナのどこが悪いのかはつきりしやしたぜ！」

「・・・・・・どこの？」

まだ立ち直れないが、とりあえず杉彦はぴょん太の意見を聞いてみる。

「まざあ緊張し過ぎでさあダンナ！そんで油断し過ぎなんでさあダンナ！そのスキにつけ込まれるから失敗するんでさあダンナ！」

ぶわっ！杉彦の目から大量の涙が溢れ出た。おそらくナイアガラの滝レベルだ。

「なっ、んなこたあわかってるんだよおおおおお！！！！！」

杉彦は泣きながら絶叫した。

「まあまあ、続きを聞いてくだせえダンナ。要は緊張と油断を取り除きゃあいってわけですぜダンナ！」

「えゝゝゝ！ぞうだろゝゝゝどもゝゝゝ！でもゝゝゝどうゝずんゝのゝざゝ！」

「そこがあっしの腕の見せ所でさあダンナ！あっしの考案した特訓を積みめば、間違いなく告白できますぜダンナ！」

自信満々で語るぴょん太。

なるほど、そういうことだったのか。

ていうか、今回わざわざ告白しなくても、今まで杉彦の動向を見続けてきたのならわからなくもないはずだが……。

どうにも胡散臭いタヌキだと杉彦は改めて思った。

だが、怪しい人間に「これで絶対好きな女の子と付き合えますよ」的なこと言われて、変なマニュアル本や壺を買わされるよりはマシなような気もした。

それにこいつの言うことには「告白すること」がまず重要であり、その後の事は考慮に入れていない。

そこからは本当に自分次第ということなのだろう。

緊張と油断を取り除くだけなら確かに価値はあるんじゃないかと杉彦は考えを巡らせた。改めてどうしようか悩んでる杉彦に、ぴよん太はとどめの言葉を放った。

「……嫁ぐ」

ギョーンツと杉彦の頭に急ブレーキがかかった。

嫁ぐ……昨日ぴよん太が杉彦の説得に使った「あのお嬢さんだっていっぱしのおなご。いずれどこぞの輩の元へ嫁がなきゃならねえ」という言葉が頭をよぎった。

そうだ。

このままでは他の男に彼女を取られてしまうんだ。

一時停止した脳からブルンツと再びエンジンがかかる音がした気がした。

あきらかに表情の変わった杉彦を見たぴよん太は満足げに、

「ふふ〜ん、その顔！その心意気ですぜダンナ！じゃあ早速特訓を開始しましょうぜダンナ！」

「おおおおおお！！！」

杉彦は小学生か！とつつこみたくなるような大声を出して、腕を天高く突き上げた。

ここから、杉彦のストーカーからリア充への華麗なる転身物語が幕を開ける。

だが、この二人（一人と一匹）のやりとりを遠くから眺めている人間がいたことを、杉彦は知らない。

【8】ヒロインの変化

一方、杉彦の追っかけ対象から一時的に難を逃れた氷群だが、杉彦が毎日のように彼女の行動を追っていることに、当の本人はまったくもって気づいていなかったりする。

したがって、今から彼が氷群に告白するための特訓を始めたことなど知る由もなく、今日も黙々と『シルヴァー・ハント』本部ビルで、訓練を続けているのであった。

彼女らの訓練は主に組み手が基本となっている。

常に無秩序な動きをする対象とやりあうことで、洞察力、臨機応変さを養っているのだ。

彼女らはあくまで、獣もどきの捕獲と、一般市民に被害が及ぶのを防ぐことが任務だ。

殺傷力はあるて越したことはないにしろ、現場では過ぎた力であり、あくまで人命を優先する為の技術を修得することが旨となっている。

今、氷群は同僚の女性と組み手を行っていた。

相手はトンファーを用いて、主に打撃技を駆使してくるのに対し、氷群は木刀を左手に持ち、右手は素手。

相手のトンファーによる乱撃を右手でかわしつつ、左手に持った木刀で相手の急所すれすれに打ち込んでくる。

相手も片方のトンファーで氷群の木刀を防ごうとするが、木刀による打撃のパワーがあまりにも強く、力を流しきれないで、吹き飛ばされてしまう。

「ひ、氷群さん…….ちよ、ちよっとやりすぎじゃない？」

そばで2人の組み手を観戦していた同僚が、少し青ざめた表情で吹き飛ばされた女性に駆け寄った。

「……すまない。余計な力が入ってしまった」

氷群は素直に非を認めた。

「……だが、実際の相手は手加減をしてはくれない。貴女も全力で向かってきてくれて構わない」

淡々と述べる氷群。

駆け寄った同僚が少し嫌な表情を浮かべたが、倒れていた同僚はゆっくりと起き上がり

「そうだよ。氷群さんの言うとおりよ。もう一度お願いします！」と力強く応じた。

氷群はそれにならずいて応える。再び組み手が始まった。

先ほど、氷群が余計な力が入ってしまった要因は、実は杉彦にあった。

「ふっ！はっ！やっ！」

相手のトンファアの連撃を気迫ある発声と共に華麗に避けつつ、氷群は近い過去を振り返っていた。

ここ一年、時折氷群の前に急に現れ、意味不明の言葉を発しては消え、発しては消えを繰り返してきたあの少年。

端から見たら変態が襲いに来てるようにも見えるらしいが、氷群にはそう思えなかった。

顔を真っ赤にして、肩で息をして、足を震わせて、それでも何とかとても大切なことを言おうと、目を輝かせて。

あの目を見ていると、どうにも邪心を感じない。

彼の懸命さに応えなければならぬ。

そんな思いにさせられる少年。

だが寸でところで必ず彼に不運な出来事が起き、結局最後まで彼の言葉を聞くことが出来ないでいた。

始めのうちは、他愛もないことだろうと気にせずにはいたが、こうして度重なっていくうちに、少しずつ、彼に対する気かけが積み重なっていく。

氷群にとって、この感覚は生まれて初めてのものだ。

この感覚を、何故か氷群は大事にしたいと思った。

「っ！？」

考えごとをしているうちに、トンファーが氷群の顔を少し掠り抜けていった。そのまま氷群は床にへたりこんでしまった。

トンファーを繰り出した本人も驚きで硬直してしまう。

現在、この『シルヴァー・ハント』内で氷群は一位、二位を争うハントエキスパート戦闘の上位者だ。

多少の油断があつたとしても、顔にダメージを受けることなど今までなかった。

「氷群さん！」

二人の組み手を観戦していた同僚が、今度は氷群の方の駆け寄ってきた。

「ど、どうしたの？氷群さんらしくないよ？」

しばし呆然となっていた氷群が、同僚の声かけで正気を取り戻した。

氷群はゆっくりと立ち上がりつつ、

「……大丈夫」

「氷群さん、さっきからちょっと変だよ？最近、任務も増えるし、疲れてるんじゃない？」

やたら氷群を気にかけてくる同僚。

それだけ、氷群にしては珍しいことだった。

「……平気。私が油断してただけ。ごめんなさい」

「そ、そう……」

同僚はそれ以上追求はしなかった。

一方、組み手相手の同僚も顔が青ざめていた。

「……ひ、氷群さん……顔……」
めんなさい！

氷群はそう言われて気づいた。自分の右頬に縦長に入って細い傷があることに。

駆けつけた同僚は氷群の左側のいたため、その傷に今気づき、あつとなつた。

「た、大変！すぐ治療しないと」

「いい」

氷群は率直に答えた。

それが反射的に出た言葉だと、氷群は発してから気づかされた。

「え、だって、その傷、そのまま残っちゃうよ！や、やっぱり、氷群さんだって女の子なんだし……」

横にいる同僚が顔を斜めに伏せた。

周りの人間にもわかっていた。ここに集まった女性の戦闘員も、

元々は普通の女の子だ。

例え、体を張って戦う立場にあっても、日常ではまだ普通の女の子なのだ。

万が一でも、身体に残る傷が出来てしまうというのは、女の子にとってはまさに「お嫁にいけない」状態になってしまう。

だが、周りの同僚の心配をよそに、氷群はうつすらと笑みを浮かべてこう言った。

「……いいんだ。この傷は、勲章だから……」

「……え？」

周りの同僚には意味がわからなかった。

実のところ、氷群本人もよくわかっていないでこの言葉を発していた。それでも『勲章』という言葉の意味が、今の氷群の心に響くものだと、氷群はなんとなく思っていた。

その時、訓練場の扉が強く開かれ、飛鳥が入室してきた。

「氷群センパイ！ビッグマミーが呼びつすよ！」

「……わかった」

氷群は返事を返した後、周りの同僚に顔を向け、

「すまない。次は飛鳥と組み手をやっていてくれ」

「あ……はい」

同僚たちは状況をうまく理解できないまま、生返事をした。

それにうなずくと、氷群は早々にスタスタと歩きだした。

扉を出ていく時、飛鳥とすれ違いざまに言葉を交わしていった。

「飛鳥、続きを頼む」

「了解っす！」

飛鳥は小声ながら元気さのある声で応じた。

また無表情のまま、氷群はうなずき、訓練場を出ていった。

『シルヴァー・ハント』本部ビル、最上階である一〇階の一番奥の部屋に呼び出された氷群は、扉の前まできてノックをした。

「氷群・ハイリツヒシユタイン、推して参りました」

すると、ドアの向こう側から声が聞こえてきた。

「おう！入れい！」

かなり威勢がいい声が返ってきた。

「失礼致します」

氷群はゆつくりとドアを開け、中に入る。中の構図は実にシンプルだが、ビルの一室にしては異様だった。

無駄にだだっ広く、床は一面に畳が敷かれおり、書類などが棚にはなく全て横の押入れにしまっており、他には掛け軸が一对、ビッグマミー直筆の書が一点飾られていて、後はドアから一番離れた所にビッグマミー用の机と椅子が置いてあるだけだった。

そんなすっきり和室に改造された部屋にも慣れた氷群は、自然と入室しビッグマミーの机の前まで来た。

当のビッグマミーは、椅子を後ろに向け、外を眺めていた。

最初に話し出したのはビッグマミーの方からだった。

「おう！来たかい氷群」

「はい、ビッグマミー」

「いやゝ訓練中にすまないねえ」

そう言つて、ビッグマミーは持っていたキセルを粹にふかせた。あまりすまなさそうに話すビッグマミー。

だが氷群は違和感を持たず、

「いえ、問題ありません」

と応える。

「そうかい？その傷を見るってえとそうは思えねえけどねえ」

なんとビッグマミーはここへ来てまだ氷群の顔を一度も見えていないにも関わらず、氷群の顔の傷があることに気づいていた。

しかし、それに驚く様子もなく、氷群は応えを続ける。

「これも問題ありません。それより、ご用件を」

あくまで冷静に応じる氷群。

「おおーそうだったな。早速だが氷群よ、おめえさんに一人、部下をつけようと思ってる」

「部下……ですか？」

思ってもいない用件だった。

「そうだ。部下だ。といっても、まだそいつあウチの組織に入っていないやつなだけだよお」

「え？」

氷群はここで疑問を感じた。

まだ組織に加入してない人物を部下にするとはどういうことだろうか？率直に氷群は尋ねた。

「ビッグマミー、それはどういう……」

「まあ気がはええたあ思ってるんだがねえ、そう先の話になるとも思えねえから、先に話しておこうと思っただけのことさあ」

先の話にはならない？ますます疑問が募った。

この『シルヴァー・ハント』^{ハンターズ・チルドレン}の正式な戦闘員^{ハンター}になるためには、まずこの組織に加入し、訓練生としてみっちり鍛え上げられ、そこから優秀な戦闘員^{ハンター}になれると認定されなければならない。

現在は、その訓練生間の競争が激しく、よほどの強者でない限りは、簡単に戦闘員^{ハンター}になれるわけではない。

この掟は絶対であり、コネなどで上り詰めてくる輩もないのだとしたらどんな人物が氷群の部下になる予定なのか？

「ビッグマミー、一つお聞きしてよろしいですか？」

「ん？なんだい氷群？」

氷群はおそろおそろ訊いてみた。

「その、私の部下になるといふ人物は何者なのですか？」

「そいつあな・・・・・・・・アタシの孫だ」

【9】主人公のおばあちゃん

「はあはあはあはあはあはあはあはあはあ」

「ほいほいダンナ！まだまだですぜダンナ！」

「も、もうす、すこつ、しつ、てえ、へえ、言わ、れつ、つてもつ、がはあ」

へたり込むように倒れる杉彦。

ここは杉彦の住む街のはずれにある河原の土手。

これまでの杉彦の走行距離、おおそ四キロ。一般的にはジョギングで軽く汗が流せる程度の距離だが、運動不足の杉彦にとっては100メートル走を全速力で走るよりも辛かった。

地面に突っ伏して息を切らせている杉彦に、一緒についていたぴよん太は喝を入れる。

「ほら！起きて下せえダンナ！！まだぜんぜん進んでませんぜダンナ！気合いが足りねえっすよダンナ！！」

杉彦はそのままの体制で応じる。

「どうあ、だつ、て、はあはあ、もう、はあ、むりい、はあはあ」

「これが終わったら腹筋、背筋、腕立てを1000回やるんですぜダンナ！」

「ぶふっ！む、むちゃだろ、そら！」

吹き出す杉彦。聞いただけで乳酸が溜まりそうな数字だ。杉彦じやなくてもたいてい無理がある。

「そこまでやらないとお嬢さんに追いつけませんぜダンナ！」
「っ……！！」

杉彦の脳裏に氷群の姿が浮かび上がってくる。

なんでこんなことをやっているのか。すべては氷群に告白するためである。

杉彦の無謀な挑戦を基に、ぴよん太が導き出した答え。一つ目は体力だった。

杉彦の告白パターンを見ると、必ずと言っていいほど、何かに妨害されている。アンケートの人だったり、おすもうさんだったり、時には妖精のめいけんだったりにスキをつかれたこともあった。

まずはこうした不測の事態に対処出来なければならないと、ぴよん太は体力強化を提言した。

それを聞いた杉彦は、ぶっちゃけ体力があってもおすもうさんとかどうになるもんじゃないだろうと思ったが、氷群に何かあつては困るし、いざという時に彼女の盾くらいにはなりたいと解釈を変えた。

そこで早速ランニングから始めた杉彦だったが、このザマである。「こんなところで終わっちまっていいんですかいダンナ？お嬢さんを他の男に取られちまいますぜダンナ！」

更に強い口調で激を飛ばすぴよん太。

今更ながらタヌキに怒られる人間の図という、なんともシュールな光景がここにあった。

先ほどから氷群の姿を思い浮かべ、思わずニヤニヤしてしまっていた杉彦だったが、他の男という単語で一氣に頭がリセットされた。とにかく一ミリでも彼女に近づきたい。今は強くなることがその最短距離だと、杉彦には思えた。ゆつくりと立ち上がる杉彦。

「ようし、こうなりやとことんやってやろうじゃないか……
。。行くぞ！」

「よだれ拭いて下せいダンナ」

かくして気合いを入れ直した杉彦は、再び走り出した。

目標総距離、五〇〇キロを目指して。

まあこの目標を達成するのに、数十日かかったのは言うまでもない。

その後、筋トレなどを経て、杉彦本人としてはいくらか体力向上に成功したという自負が生まれた。

「よくここまで耐えられましたねダンナ！あっしは嬉しいですぜダ

ンナ！」

タヌキの目にも涙。

「いやぁ……何度か逃げたけどね」

杉彦は笑顔をヒクヒクひきつらせる。

「その度におすもうさんにはり倒されたり、スキあり妖精にどつかれたりしてましたねダンナ」

「いっぱいぬいぐるみが飛んできて幼い女の子に囲まれた時はどうしようかと……」

「別の道に目覚めなくて良かったですぜダンナ」

何はともあれ、第一の関門はクリアといったところか。

「で、次は何をすればいいんだ？」

「次は緊張しないために精神を鍛えましょうぜダンナ」

「精神か……」

杉彦にとつて、体力向上よりも難関ではないかと思われる関門。

別段、対人恐怖症でも何でもない杉彦が、氷群の前だけ異常に緊張してしまうというのは極めて特異だ。

逆に、これさえ解決できれば、告白だけなら大した問題ではないのだ。単純かつ難易度の高い課題と言えるだろう。

これを一体どうやって杉彦に解決させようと考えているのか、このタヌキは。

「体力向上に時間をかけちゃった分、こちとらはとつと解決しちまいましょうぜダンナ！」

「え、何か妙案があるのか！？」

果たして、その妙案とは……。

「まあ要するに『習うより慣れる作戦』ですぜダンナ！今回は特別に協力者を用意しやしたぜダンナ！」

「ふえ、協力者あ！？」

こんなタヌキの言うことに聞く耳を持つ人間が他にいるというのか？

「ささっ、出てきて下せいお嬢さん！」

お嬢さん！？こいつが言うお嬢さんっていったら、氷群以外に誰がいるんだ！？

「ハ、ハイ……」

ぴよん太の呼び声に、近くの電信柱の陰から可愛らしい声で返事が聞こえてきた。

すると、そこからなんと氷群……。杉彦の予想に反して、氷群とそっくりな格好をした、氷群をそのまま小さくしたような女の子がひよっこり現れたのだ。

また氷群と違い、凜とした顔つきではないが、少し垂れ下がった大きな目と少しふくらした頬が愛らしく、鼻筋もきれいで普通に美少女だった。

しかし、なぜこんな娘が突然現れたのか？

ゆっくり土手を上って杉彦の方に向かってくる謎の美少女。歳は杉彦とそう変わらないくらいだろうか。

「あのー、ぴよん太サン？あの娘はなんなの？」

「あつしが昨日の夜、街に出てたまたま通りかかったあのお嬢さんに声をかけてきたんでさあダンナ！」

「声かけたって……」

しゃべるタヌキが急に街に現れたら大騒ぎになるだろう。つか、タヌキが夜の街でナンパとかどんだけシユールなんだよ、と。

「コイツがまた運よく聞き分けのいいお嬢さんでして、『あつしのダンナの力んなっちゃあくれやせんかねえ？』と頼んだら、二つ返事で承諾してくれやしたぜダンナ！」

ほんとか！？どんなミラクルだよ！？杉彦には理解不能だった。

杉彦とぴよん太が会話しているうちに、謎の美少女が河川敷の上まで上がってきた。彼女はやはり恥ずかしいのか、頬を赤らめてうつむきがちになっていた。

「お嬢さんの名前は内気赤良さんうちきあからだそうですねダンナ！」

ぴよん太は手を彼女の方へつきだして、彼女を杉彦に紹介した。すると、赤良は急に顔を上げ、

「あつあつの！……はっ、はじめまして！」

と言っておもいきり頭を下げた。その勢いでかぶっていた氷群の髪型をしたカツラがスルッと落ちて、赤良本人の地毛が露わになる。

薄い紅色のショートヘアで、髪質はさらつさら。バツ止めたヘアピンがとても愛くるしい。正直、顔も含めそのままで十二分に魅力的な女の子だった。

「はわっ！あう、あうっ！」

落ちたカツラをあわてて拾い、付け直す赤良。その道の人間なら劇画タッチの顔で、爽やかに鼻血を流してしまいそう。そんな赤良の魅力が溢れ出ていた。

それをなんとも複雑な表情で見つめる杉彦。

くあいいのは確かなのだが、なんか格好まで仕込んでくれて申し訳ないという気持ちと、でも自分はやっぱり氷群さん命だしなあという気持ちで脳がざわついている。

「んで、こちらが昨日話したあつしのダンナでさあ！」

今度は杉彦を紹介するぴょん太。

「ど、どうも……」

杉彦は気まずそうに会釈する。

あせってカツラがずれずれになってしまっていた赤良だったが、

「へあ！？あ、はい！旦那さん！は、はじめまして！」

と言つて、また頭を下げるものだからまたカツラが飛ぶ。

まったく……かわいいやつめっ。

再びカツラをかぶった赤良を見届けて、ぴょん太が本題を切り出した。

「じゃあダンナ！さっそくあのお嬢さんをお嬢さんの見立てて、告白の練習をしちゃって下せえダンナ！」

うん、そういうことね。

赤良が時間をかけて体制を整えてる間に、なんとなくわかってはいた。

でも、今となつてはムダな練習だという直感めいたものがあつた。確かに杉彦が氷群の外見を好きなのは疑いない。外見の好きな点を挙げるとすれば、自身のつかれた隙の数より遙かに多い。

でもそれだけではないのだ。

氷群の仕草、感性、言動、匂い、思考に至るまで、全てが好きなのだ。

今日の前にいる彼女には申し訳ないが、氷群と向かい合つた時の感覚とは、雲泥の差がある。

そうなつてくると、練習で成果を出せない〴〵本番でも成果を出せない、という理論が成り立つのではなからうか。

「なあ……これはやめにしないか？ やつても意味ないだろ？」

杉彦がぴよん太に軽く耳打ちする。

「あめえですぜダンナ！」

ぴよん太の力強い返答に、杉彦は思わず気圧された。

「重要なのは見た目じゃねえ、中身ですぜダンナ！」

いやだからそこが矛盾してるんだって。杉彦が反論しようとする
と、

「矛盾してませんぜダンナ！」

また心読まれた！ なんだこのタヌキ！

「じゃあ訊きますけどねえダンナ！ ダンナは赤ん坊ん時からこの歳まで、一回以上女に告白したことあるんですかい！？」

ズガーーーーーン！ と、雷に撃たれたような衝撃が杉彦を襲つた。「一度も女に自分の愛を捧げたことのねえダンナが、どうやってあの才色兼備で、非の打ち所のねえお嬢さんに告白するっていうんですかい！？」

ズガガビーーーーン！！ 杉彦の脳内が、激しい雷雨に変わり始めた。「あつしが言いてえのはダンナの中身ですぜ！ ダンナが一度でも自分の愛を人に打ち明けてこそ、一皮向けた男として晴れてあのお嬢さんに挑む権利を得れるってもんですぜ！」

もうここまで言われたら認めざるを得ない。

このタヌキは神であると。恋愛の神様なのだ。

頭がくらくらしまくっている杉彦は、倒れないよう賢明にふんばりながら、

「わ、わかった・・・・・・」

「その意気ですげダンナ！」

足をふらつかせたまま、赤良に近づく杉彦。

先ほどから二者のやりとりを、頭上にはてなマークを浮かべて待っていた赤良が、急に近寄ってきた杉彦に少々ビビリ気味。

それを杉彦は全く気にせず、うなだれたような格好のまま赤良の目の前で足を止める。

目を丸くして、

「はううう！！」

と焦る赤良。かわいい。

すると、杉彦がいきなり赤良の肩をガシツと掴み、顔をギューン！と上げ、赤良と真っ正面から向き合った。

そして思わず硬直してしまった赤良に向かって、

「氷群さん！！」

と叫んだ。

「ええ！？わた、ひむ！？あか、え？ふえ？」

すっかり混乱してしまった赤良を無視して、あとはどうにでもなってしまうという気持ちで杉彦は体を動かし、燃えたぎる瞳を彼女の向けたまま、勢い良く言い放った。

「ずっと前からあなたのことが大好きです！！！！どうか俺と付き合ってください！！！！」

言った。ついに言った。

人生初の告白。

といってもあくまで練習に過ぎないのだが・・・・・・。

自分のことではないにも関わらず、告白を受け取った赤良はまた硬直し、顔が下から上へどんどん真っ赤になっていた。

「はわっ！ふえあえあえ……や、ええつとあー」

この場合、どう反応したらいいかわからない赤良。脳はすっかり機能不全に陥っていた。

そこへ告白の勢いそのままに、杉彦がまっすぐな目で見つめ続ける。

実は杉彦も、このあとどうすればいいのかわかっていなかったりするのだが。

「にやわっ、ふあ！ふー……とー……ご、ごめにゃさいい！！」

とうとう赤良は耐えきれなくなり、肩を掴んでいた杉彦の手を振り切って、顔を手で覆いながらものすごい速さで走り去ってしまった。

それをあ然としながら見送る杉彦。

……てか、ごめんなさい……？

彼女の勘違いか？一応、練習なんだし、ここはOKを出してくれてもいいんじゃないか？

なんか頑張ったのに報われなかった感のある結末。どうもしっくりこない。

エネルギーこそ使ったものの、杉彦にしてみれば、そこまでハドルの高い障害ではなかった。

ぶっちゃけ、事前の予想通り、無意味に終わった。

それに逃げられたし。続きどうすんの？

「大丈夫ですぜダンナ！また今晚、別のお嬢さんをひっかけてきやすんでダンナ！」

あっけらかんとしたびよん太の対応に、ついに杉彦の怒りは頂点に達した。

「もういい！！こんなことやっても意味ないって！！もうなんでもいいから氷群さんとこ行くぞ！！」

「ダメですぜダンナ！まだ次の特訓が」

「次もくそもあるか！！！！こんななんべんやってもムダじゃあ！！」

「お気を確かにダンナ！」

真つ昼間からわーきゃーと騒ぎ立てる一人と一匹。

普通なら変質者出現と言われ、通報もやむなしとされそうな場面。そして案の定、そこに忍び寄る警官の陰が……

「おう！おう！元気にやってんねえ！」

杉彦もぴょん太も取っ組み合いになっていて、その人物が近づいてきたことに気づかなかった。

そして杉彦の視界の隅に、警察の制服が見えた途端、思わず動きが止まってしまった。

よく見ると、制服を着ているのではなく、肩から羽織っているだけのようだ。

「あ」

杉彦は無意識に情けない声を出していた。

その人物に、杉彦は見覚えがあったのだ。

「むかしやあ拳の一つも握れねえガキだったてえのに、この短期間でイイ男になったもんだねえ」

半笑いで語らうその人物。

鮮やかな藍染めの着物と、金の刺繍が入った、豪奢な紅い帯。その上から警官の制服を羽織って、警帽をかぶってくわえキセルという奇抜なファッションスタイルをしている。

でも見間違うはずがない。

昔から変わらない、後ろ髪だけお団子結び、残りは軽くウエーブのかかった抹茶色の長髪。

間違いない。

「ばっ、ばあ！」

「よお、杉彦。おばあちゃんだぞ」

彼女こそ、杉彦の祖母、隙有真知子、すきありまろこその人である。

年齢は60歳で、話し方が古風だがその実、顔はとても若々しい。化粧が薄めにも関わらず、肌にハリツヤがあるし、目も大きく瞳がキラキラしている。

普通に見かければまだ二、三〇代くらいにしか見えない。

急な祖母の登場に驚きを隠せない杉彦。

何しろ、杉彦は祖母が警察で働いているというところまでしか知らないのだ。

しかも重要なポストについているとあって、普段は滅多に自宅には帰ってこないの、しばらく会ってもいなかった。

そんな祖母が、こんな昼間からいきなり自分を訪ねてきたことにビックリしているのだ。

「ばあちゃん、どうしたのさ、いきなり？」

「どうしたのってつねえなあ杉彦お。ばあちゃんが孫の顔見にきちやいけねえってのかい？」

「いや、そうじゃないけど、忙しいんじゃないの？」

杉彦の質問に、真知子は軽くキセルをふかしながら、

「ああ忙しいぞ。だから孫の手え借りにきたのさあ」

「え？」

思わず疑問符の浮かぶ杉彦。警察なんかを手伝えることなんかあるのだろうか？それともまさか、ぴよん太の存在がバレしてしまったのか？

かくいっぴよん太はなぜか真知子を見たたん、ぶるぶる震えだして杉彦の後ろに隠れていた。

「一緒に来な、杉彦。おめえさんはこれから、うちのファミリーになるのさ」

は？ファミリー？もう家族じゃん？

まったくちんぷんかんぷんで顔に皺が寄りまくってる杉彦を見て、真知子は思わず吹き出しながら、

「さあアタシや気がみじけえんだ。こまけえこたああとで聞かせてやる。行くぞ」

真知子がそういうや否や、杉彦の耳にだんだんと大きな音が聞こえてきた。杉彦は空を見上げて更に驚愕する。

ヘリコプターだ。ヘリコプターがこちらに向かってきたのだ。

予測不能の展開が続き、全くついていけない杉彦。

それをよそに、ヘリが河川敷に降りてきた。そこから一人の女性がヘリを降りて現れ、

「ビッグマミー、急にお出かけになられては困ります」

冷静な声で真知子に呼びかけるダークスーツを着た女性。

「へ？びつぐまみー？」

また驚きが増えてしまった杉彦。それを真知子は無視し、

「おーすまんねえ火蔭^{ひかげ}！」

火蔭と呼ばれた女性に手を振る。

「急な思いつきで行動するクセはお直し下さい」

「もうばあだぜアタシや。今更じゃねえのさ」

「それもそうですね」

「くらあ！否定せんかい！」

などと、漫才を始め出した。

「もういや・・・・・・」

どうでもいいから、早く氷群さんに会いたいと強く願う杉彦。

すると、急に真知子が杉彦の方を向いてこう言い出した。

「じゃあ行くぞ杉彦。おめえのその望み、叶えてやらあ」

またしても心を読まれた杉彦。

そして、真知子の言葉の真意とは・・・・・・？

【10】主人公の本領

―対獣化犯罪組織『シルヴァー・ハント』本部ビル内、食堂にて―

「はぁ・・・・・・・・・・」

「あら、どうしたの？いつものムダな元気は」

「ムダは余計だろう・・・・・・・・・・」

「でもほんと元気ないのね」

「そりゃ元気もなくなるさ・・・・・・・・・・聞いてるか？例の話」

「例のつて・・・・・・・・・・ビッグマミーが訓練生に自分の孫を入れた
つて話？」
ハンターズ・チルドレン

「ああ、それだ。あーもー思い出したくもねえ」

「あんたから話持ち出してきたんじゃない！」

「そうだけど・・・・・・・・・・」

「で、その話がどうしたのよ？」

「今、その孫と組み手してきた」

「え？」

「それで圧倒された」

「ええ!! あんたが!?!」

「そ」

「性格も容姿もいまいちだけど、戦闘能力の高さだけで正式戦闘員候補になってるあんたが!?!」

「前二つはほつとけ……………」

「なんで負けたの? 油断? 顔がキモいから?」

「バカ言え、素人相手なら油断してても気後れすることあねえ! あと顔はやめて」

「じゃあなんなのよ?」

「言いたかねえが……………あいつ、つええぞ」

「強い? まさか」

「俺もそう思ったよ。でも事実だ」

「へえ……………すごいわね」

「すごいってレベルじゃないぜ、ありゃ」

「えーどんだけよ!」

「蛇嶋へびしま、それは俺から説明させてもらおう」

「あら、蛙峠かわすとうげ」

「俺はこいつらの組み手を見てたし、相手した蛞嶋なめしま本人に説明させるのも酷そうだしな」

「ほつとけよお……」

「それでそれで、どうだったのよ!？」

「ああ。まずは経緯から話そう。今朝、急にビッグマミーがお孫さんを連れて訓練場にやってきて、『今日からうちのファミリールなつたアタシの孫だ。ま、適当に可愛がつてくんねえ』とか言ってきたんだ」

「うんうん」

「それで早速、組み手相手に蛞嶋を指名してきて」

「うんうん」

「さすがに場にいた全員が大笑いした。力の差がある者同士の組み手は、下手をすれば命取りだからな」

「そうよね」

「でもビッグマミーが了承済みだということで、蛞嶋は仕方なく組み手の相手をする事になった」

「それでそれで」

「それがこいつの運の尽きだった」

「うるへー」

「まあ相手はビッグマミーのお孫さんとは言え、格闘技もスポーツさえもほとんど経験のない、ズブの素人だって話だ。最初はこいつも手加減してやろうと思っていたみたいだ。ところが、お孫さんが木刀を居合いのように構えた途端、彼から異様なオーラが溢れ出てきたんだ」

「オーラ？」

「そうだ。それも周りで見ていた全員がそれを感じ取れるくらいのオーラで、全体がざわついた」

「うつ、うん」

「特に蛭嶋は彼のオーラを一番強く感じていたようだ。かなり焦り出した。普通ならば下の者が胸を借りるという意味で先手を打つが、何を思ったか、蛭嶋が先手を打ちにいつてしまった」

「・・・・・・・・くっ」

「こいつはそのまま勢いに任せて、全力で彼の手を狙いにいった。だがなんと、お孫さんがそれを読んでいたんだ」

「うそっ！」

「足を一步引いて小手をかわし、懐に入ってきた蛞嶋へそのまま構えていた木刀を放った」

「・・・・・・・・」

「またその放った一閃も凄まじかった。当たる直前、蛞嶋はやばいと思ったんだろう。ギリギリで体をひねって避けようとした。なんとか直撃は免れたが、あまりにも剣圧が大きすぎて吹っ飛ばされてしまったんだ」

「マジで!？」

「おそらくあれが直撃していたら間違いなくあばら骨を粉々にされていたことだろう・・・・・・・・」

「うええ・・・・・・・・」

「あいつあ全然素人じゃねえよ・・・・・・・・あの抜刀術は荒削りだが破壊力がおかしい。それに殺人鬼かつてくらいヤバかったぜ、あのオーラ」

「ま、まあビッグマミーも相当腕あるし、隔世遺伝とかじゃないの?」

「それは否定できないな。それにしただってあの技術と力はどこから来ているのか・・・・・・・・」

「本当よね・・・・・・・・」

「あとヤバかったのはあいつの目だ」

「目？」

「あいつの一閃くらいそうになった時に見えたんだが……………」

「うん……………」

「ハートの形してたぜ」

「ハ？」

「どうやら、周りにいた見学者の中の誰かを見た時から、そうなっ
ていたらしい」

「見学者って……………あ、そういえば女の子たちの間でこんな
噂があるのよ」

「噂だあ？」

「なんでも、氷群・ハイリツヒシュタインに何度も声をかけてる変
態がいるらしいの。それがビッグマミーのお孫さんと似てるんだっ
て」

「……………あー」

「もしかして、追っかけ行為の延長でここまで来たんじゃないかつ
て騒がれてるわよ」

「……………だとしたらアレか？ “愛のパワー” ってやつなのか
？」

「ひ、非科学的な……………」

「お、恐るべしね、愛のパワー……………」

「あと、こつちも噂なんだけだよ……………」

「何よ？」

「最近、この本部のそばで時々、不審者が出るって話でさ。俺らの中で顔がいい奴が狙われてるらしいんだわ」

「あら、イケメン相手のストーカー？あんな関係ないじゃない」

「うつちゃいわ……………それが、狙われてんのは“顔がいい女”もらしいぜ」

「うわ！！相当な変態ね！」

「つーかお前が知らないってのは、お前にも関係ない話か」

「ア・ト・デ・コ・ロ・ス」

「……………」

「ゴホッ、蛞蝓の話、引き継ぐぞ。その変質者がまた、ビッグマミノ、しかも“女のお孫さん”に似ているという噂だ……………」

「……………私、この組織、抜けようかしら」

「こらー！あんなたちー！もう閉店時間過ぎてるよー！お残しは許さんでえー！」

「はい」

【11】祖母の経歴

杉彦と広美の話存在が訓練生の間で物議を醸している頃、ビッグ・マミーこと隙有真知子は、シルヴァー・ハント本部内にある自室でぼんやりと昔のことを思い返していた。

今から約三年前、この街で五本の指に入るほどの、資産家の邸宅に強盗が押し入った。

強盗は始め、金品を盗んで立ち去るつもりだった。しかし、怪しい物音を聞きつけた資産家の娘に金品を盗むところを目撃されてしまった。

その時、娘の姿を見た強盗に異変が起きた。

「ぐ、ぐおあああああああー！」

強盗は急に苦しみうなり声を出すと、強盗の体を覆う全ての皮膚が灰色に変色し始めたのだ。次に上半身の筋肉がボコボコと隆起し、頭部が酷く歪み、口が尖り、耳が大きくなっていく。

娘ははつきりと見ていたわけではなかったが、気がつくと目の前にいた強盗の上半身だけがネズミのような容姿に変化していたのだ。あまりにも唐突で衝撃的すぎる出来事に呆然とする資産家の娘。そこへ強盗の奇声を聞いた両親と近所の人間が現場に駆けつけてきた。しかし、現場へ到着した誰もが資産家の娘と同じく、強盗の異様な姿に声一つ出せなかった。

上半身だけ人の形をほぼ失った強盗は、ゆっくりと周りを見渡すと、まず一番に娘の父親である資産家を拳で殴り飛ばした。その後も周りにいた者全員を殴る蹴るの暴行によって蹴散らした。

そして最後に残った資産家の娘の前に立つと、すでに力が抜けてへたり込みガクガクと震えている娘を押し倒し、服を破りだした。

本能ながらに娘は感じた。犯される、と。

「う、うつ！ぐふうあつ」

ぐちゃぐちゃにかき乱される自分が頭の中を支配し、思わず嘔吐

してしまう。

そんな娘の乱れようなど全く構うことなく、強盗は自分の下半身を露出させ、ゆっくりと娘の下半身へと近づけた。

「つつつつつ！！」

娘の声無き悲鳴。

強盗以外、誰しもが絶望しそうな状況。

ほんの一瞬前まで、世界を包み込んでいた綺麗な包装紙を汚く無惨に破かれる瞬間。鬼畜なる終焉。

だが、その瞬間の何百分の一にも満たない極小の時間に、奇跡は起きた。

強盗の背中に、頭から尻まで縦に大きく一つの筋が走ったのだ。

その途端に、強盗の動きが止まる。しかし、筋が入っても何も起きない。

その違和感に耐え兼ね、強盗がゆっくりと首だけ後ろに回し、片手で筋の入った箇所を触った。

その筋の正体は、とてつもなく斬れ味の良い、刀の斬り口だった。強盗がその斬り口に触れた瞬間、筋から一斉に血の飛沫が吹き荒れる。

そこから急激に痛みを感じ出した強盗は、激しいほうこうを發してその場にのたうち回った。

娘はその時、何が起こったのかよくわからなかった。ほんの少し前まで想像していた絶望的な予想があつさりと覆されたのだ。

霞んだ視界の中、のたうち回る強盗越しに、人の影が見えた。

赤くぬめりを帯びた液体が付着した、長い刀を持った人物。

窓から入る月明かりに照らされ、刀の液体がついていない部分がキラリと光っている。

更に月明かりによって浮かび上がった姿から、綺麗な起伏のある体型の、警察の制服をまとった女性だと認識できた。

その女性はゆっくりと娘に向かってこう言ってきた。

「目え伏せてなあ、お嬢ちゃん」

その言葉で急に緊張の糸が切れたのか、娘はゆっくりと目を閉じて、その場に倒れた。それを認めた女性は、左手に持っていたキセルを口にくわえ、両手で刀を持ち、刃先を下に向けた。だんだんともがきが緩慢になってきた強盗の喉に刃先を突きつける。

女性は静かに告げた。

「あばよお」

刀はスツと流れるように、強盗の喉を一気に貫いた。

吹き荒れる血飛沫をもろに浴びるが、女性は表情一つ変えない。音のない悲鳴を上げた強盗は、ピクピクと痙攣して次第に動かなくなった。

隙有真知子。

これが、彼女にとって初めての『殺害行為』となった。

真知子が邸宅から出てくると、真知子に向かって一斉に多くのフラッシュがたかれた。周りを見渡すと同じ警察の関係者に始まり、マスコミや野次馬などでごった返していた。

真知子が出てきた時、歓声やら悲鳴やらが起きて場は一気に騒然となった。

無理もない。真知子の体にはあちらこちらに血がべっとりついていたのである。

だが、そのような状況にあっても真知子は涼しい顔で現場を後にしようと歩きだした。

普通ならば、こんな話題になりそうな事件の当事者にマスコミがこぞって囲みにくるはずだが、血まみれにも関わらずあまりにも平然とした真知子の態度に、マスコミは気味悪がって近づいてくることはなかった。

そのまま署に向かおうとする真知子に、後ろから一人の女性が声をかけてきた。

「ふ、副總監!!」

真知子は立ち止まり、後ろを向く。

一人の婦人警官が荒い息をはきながら真知子に向かって叫んでいた。

「副總監、そ、その血は………」

婦人警官の顔は酷く青ざめていた。

その要因は真知子の全身に浴びている血の量のこともあるが、それより大きいのが今後の真知子の処遇だ。

現在、隙有真知子は警視庁の警視副總監の地位にいる。

その重役が、たとえ獣化した犯罪者だったとはいえ、一人一人を殺したとなればどうなるか………

誰でも簡単に予想できることだ。

一方で獣化犯罪者事件での死者が多数出ている中、一人も被害者側の死者を出さずに事を終えたことは、ある程度の評価もされるだろうとも推測できる。

そんな複雑な事情が絡み合う中、真知子は既に自分の身の振り方を考えていた。

「火蔭え」

「はっ、はい」

急に声をかけてきた真知子に、火蔭と呼ばれた婦人警官は、少々驚く。

「アタシについてくる気はねえかい？」

「え！？」

火蔭の驚きが膨れ上がった。

ついてくるとはどういうことなのか？

急に何を言い出すのか？

真知子は火蔭の表情を気にせず続けた。

「アタシやあ、警察を出ていくよ。このままじゃあ皆に迷惑かけちまいそうだしねえ」

「え、そんな………そんなこ」

「ほら、どうした火蔭？はい！か、いいえ！か、さっさとしな」

「で、でも、副総監。警察を出ていつてこれからどうす」

「そりゃあこれから考えんのさあ。だからおめえさんにも一緒に考えて欲しいんだ」

「わ、わたし・・・・・・・・も？」

「おうよお」

真知子の口から、火蔭の思ってもいない言葉が飛び出した。

火蔭は警察に入ってまだ五年の、まだまだひよっこも同然。特別な能力もなく、ただ素直だというだけでお上からは評判が良いというだけだった。

そんな自分を、真知子は必要としてくれている。

だから、彼女の言葉が違和感から嬉しさに変わるまで、そう時間はかからなかった。こんな自分にも愛情を持って接してくれる真知子を、火蔭は自分の母親以上に慕っていたのだから。

もうすぐ六十歳とは思えないほどの若さと美貌を持ち、全婦人警官の羨望の的になっている真知子に求められるのなら・・・・・・・・

火蔭の心は動きとなって現れた。

火蔭の表情の変化を見た真知子は、静かに微笑み、また署に向かって歩き出す。その後ろ姿を、火蔭は必死になって追いかけた。

「・・・・・・・・何をニヤついておられるのですか」

追憶に浸っていた真知子に、いつの間にか横に現れた火蔭が呆れ気味に声をかけてきた。

「ん？昔の火蔭は可愛かったなあ」と

「ご冗談はご年令だけにして下さい」

「あゝたかだか三年でこんなになっちまうたあ・・・・・・・・アタシの見る目がなかったねえ」

「失礼ながら、ビッグ・マミー。あなたは見る目があつたのです。私が側近としてシルヴァー・ハントの運営に心血を注いでいなければ、確実に組織は志半ばで壊滅しておりました」

「あたゝっ！大見得まで切るようになってしまったよ！こりゃ参った

！

ペシッ！と茶目つ気たつぷりに自分のおでこを叩いてみせる真知子。

「……………ご年令をお考え下さい」

冷静だが若干引き気味の火蔭。

それでも二人の息はベストマツトしていると言える。

結局、あの事件は警察側の正当防衛という形で、大きな問題追求には至らなかった。

しかし責任は責任という形で、真知子は惜しまれつつも警察を退くこととなった。それから真知子は全く世俗から離れ、表から姿を消していた。

当時、獣の容姿に変化した犯罪者は極めて暴力性が高く、警察の取り締まりが全く機能していなかった。

そこで真知子はこの事態を重く見て、まず強力な犯罪者に対抗できる人材確保しようと試みた。

幸いにも、真知子の人徳によって多くの婦人警官が真知子の行動に協力しようと立ち上がったお陰で、手早く人員を確保することができた。その反面、男の支持者は指折り数えるほどで、結果的に戦闘員の割合は女性が多くなる形となってしまったが。

また、元・警視副総監という立場を利用して、いくつか警察とのコネを使って運営本部の設置や駐在所の合同利用なども可能となった。

こうして真知子が警察を脱退してから数ヶ月後、対獣化犯罪組織『シルバーハント』を発足するに至った。

しかし、すぐに組織の運営に大きな問題が生じてしまう。

それは、肝心な運営資金と戦闘員増員をどうするかという問題が解決できていないことだった。

獣化犯罪者の増加に伴って人員も増やさなければならぬし、集めてきた戦闘のエキスパートたちや事務員たちに支払う給料も捻出せねばならなかった。

このままでは組織存続が危ぶまれる。

真知子がそう思った矢先、火蔭から一つの案が出された。

「正式な戦闘員を育成するために学校を作ってみてはいかがでしょうか？」

それは真知子の頭になく、とても画期的な案だった。

ここまで集められた人員たちはその戦闘能力もさることながら、外見的にも魅力のある人員ばかりだった。特に氷群・ハイリツヒシユタインは男女から多くの支持を得ていたので、彼女を中心とした「魅力溢れる人間になれますよ」的な謳い文句を使った宣伝を始めたことで、驚くほど訓練生を希望する人間が現れた。

まあ実際のところ、最初に集まった人員は学校に通うことで強くなったわけではないので、言い出しっぺの火蔭が血の滲むような努力で訓練生の指導者も兼ねることで、学校の信用を真のものとする事が出来た。

この火蔭の活躍が後に本人の自信へとつながっているのだが、その代償として（と言ってはなんだが）素直で穏やかだった火蔭の性格が歪んでしまい、真知子は少々遺憾な思いを抱いていたりするのだが。

「……ところでビッグ・マミー」

「ん？なんだいい？」

「杉彦君の件なのですが、あの処遇で本当によろしいのでしょうか？」

「なんだい、火蔭え。あんたがアタシの決定に口答えしてくるなんて珍しいねえ」

「いえ、ただの確認です」

挑発してくる真知子にあくまで冷静に返答する火蔭。

しかし火蔭自身、正直なことを言えば、少々不安があった。今や杉彦の噂は組織全体に行き届いている。しかもその要因となっているのが、戦闘能力のことよりも氷群・ハイリツヒシユタインに対するストーリーカー行為の容疑をかけられていることに問題があった。

もしこのまま杉彦と氷群が直接合間見えることになるのは、組織の揺らぎにつながるのではないかという憂慮があった。

そんな火蔭の心など全く読む気がないように、真知子はくわえていたキセルを左手に持って美味そうに煙を吐き出した。

「あの子は氷群に任せるよ。本人も望んでいたことだしねえ」

「それでは部下や候補生の者たちに示しがつきません」

つい心の声が出てしまう火蔭。

「いやあ、今やあの子の実力は誰もが認めるところだろう。コネで上がるなんてえ理屈はとうに越えてるよ」

「・・・・・・」

確かに、火蔭自信も杉彦の能力については認めざるを得ないと思っていた。

それ以上に、真知子の自信満々な表情から、彼の活躍を普通の人間とは違った角度で期待しているのではないかと火蔭は勘ぐっていた。

その裏付けを、真知子の余裕しやくしやくな表情から掴み取ったのだ。

それが火蔭にとっては、真知子の本当の心が少し垣間見えた気がして嬉しかったりする。

「ま、まずは何でもやらせてみてわかることもあるってもんよあ」

「何か根拠がありなのですか？」

「ねえよ。でも価値だけはある。ばあのカンてえやつさねえ」

真知子は火蔭に向けてニヤリと笑ってみせた。火蔭は頬を少し赤らめ、それ以上何も言わなかった。

否、言えなかった。

【12】主人公の待機

真知子の予想に沿ったというか、誰もが認める、しかし誰もが複雑な心境になる結果となった。

杉彦がシルヴァー・ハントに所属して一ヶ月と経たずに、実力のみで正式な戦闘員になったのだ。

元々のポテンシャルが非常に高く、経験を吸収して実力に変えられるだけのやる気（氷群への愛情）もあって、メキメキと戦闘能力を上げていった。

ちなみに、氷群への追っかけ行為も再開させたお陰で、心身ともにますます絶好調になった杉彦（いつの間にかぴょん太の姿が見えなくなっただがまあいいか）。正式戦闘員となった今、次なる目標はもちろん、氷群のパートナーとして一緒に戦闘に参加することだ。

まあ杉彦としてみれば、戦闘などは二の次で、氷群とお近づきになることを正式に認められることの方が重要なのだが。

そんなこんなで杉彦の希望はあっさり叶い、ビッグ・マミーこと、隙有真知子は正式に杉彦を氷群の戦闘パートナーに着任させた。

ここまで来るともうハッピーエンド間近。のように見えたのだが、

.....

ここはシルヴァー・ハントと警察が合同で使用する規定を設けた派出所の一つ。

現在、氷群と杉彦は事件発生のお知らせをいつでも受けれるよう、ここで待機していた。

「.....ねえ、氷群さん？」

この派出所に勤務中で、茶色いショートヘアの婦人警官、山元徳子やまもとが気まずそうな表情で氷群に話しかけてきた。徳子は小柄なため、幼稚園児が大人に向かって話すが如く、首を上に向けている。

「.....はい、なんでしょう？」

無表情だが、しつかり徳子の顔に向けて返答する氷群。姿勢が兵隊の待機中のソレであるところが彼女らしいと言える。

「あのさ、さつきからあそこでこつち覗いてる男って……」
徳子はおそろおそろ近くにある電信柱に身を潜めている男に向かって指を指した。

その指された男こそ、隙有杉彦本人である。

ここまで心も体も必死になって鍛え抜いてきた杉彦だが、いざ氷群のそばに近づくと、重度のインフルエンザと心臓発作が同時多発する状態から相変わらず抜け出せていなかったのだった。

指を指されたことに気づいた杉彦は思わずササツと身を隠した。

それを表情を全く変えないまま見届ける氷群。

「彼ですか？彼は隙有杉彦。十六歳。男性。当組織の立ち上げ人であるビッグ・マミーこと、隙有真知子のお孫さんです。本日から正式に私の戦闘パートナーとして着任しました」

「いい、いや、そういうことじゃなくてさっ、なんであんなところでコソコソ隠れてるのになって……」

まあ一般人なら誰もが思う疑問だろう。

「彼の祖母であるビッグ・マミーによりますと、彼は重度の人見知り症候群という病を患っており、初対面の人間と関わるのにとても時間を要してしまうのだそうです」

アナウンサーのように抑揚のない話し方で氷群は説明する。

「そ、それで仕事に影響出ないの？」

氷群の説明に更に疑問を抱いた徳子は、普通にまともな意見を出した。

「戦闘になれば問題ないとビッグ・マミーから伝達されています」
徳子とは逆に、ほとんど違和感を抱いていない氷群。

ちなみに、氷群は未だに杉彦のあの行為が自分に対するものだと気づいていない。事情をよく知る真知子もこの件に関しては面白がって氷群自身には伝えていなかったりする。

そんな感じで、ハッピーエンドにはまだまだ遠い二人の間柄が続

二六八

つてきた。

「あ、お帰りなさい。黒上先輩」

冴子が自転車を降りるところへ、徳子が笑顔で駆け寄ってくる。

そんな徳子をよそに、冴子はなぜか浮かない顔をしていた。

「
・
・
・
・
・
・
ねえ、徳子」

「あ、はい。なんですか先輩？」

「あれ・・・・・」

冴子は近くの電信柱に向かつて指を指した。その電信柱は、杉彦が先ほどから隠れている電信柱だった。

「あの後ろにいる男って、もしかして隙有杉彦じゃない？」

徳子は驚きの声をあげた。

「ええ！？先輩、ご存じだったんですか！？」

「ご存じというか、友達がシルヴァー・ハントに所属しててね。そ
 の中で噂になってるらしいのよ。彼が氷群さんをストーリーカーしてる
 って」

[illegible]

更に驚く徳子。無理もない。本人の目の前で、しかも警察の派出所さえ目の前にして堂々とストーキング行為をする人間など、見たことも聞いたこともなかったからだ。

更に言ってしまうば、そのストーキング行為が、本人の祖母で且つ氷群の上司でもある人物の公認というところは、もう驚愕を通り越して呆れてしまいたくなる。

頭がパニック状態に陥つた徳子は、おもむろに手錠を取り出して杉彦の方へ向かおうとする。

「ま、待つて徳子！」

それを冴子は必死に取り押さえた。

「気持ちには分かるけど、そもそも本人が被害を受けている自覚がないし、被害届けも正式に出されていないのよ!？」

「は、離して下さい先輩！！警察とかいう以前に、女として許せないんですう！！」

「あんた、昔になんかあったの！？」

などと警察官にあるまじきドタバタ劇を二人が繰り広げているのを、氷群は涼しい目で見守っていた。

そして、彼女たちの一連の動作を、じっとしながら見届けている杉彦。

（こ、こんなんじゃ戻るに戻れない・・・・・・）

実のところ、そろそろ普通にしなきゃいけないんじゃないだろうかという気持ちが芽生えだしてきていたのだが、あんな感じのお出迎えであれば、正直御免被りたかった。

こんな感じでそれぞれがバラバラな状態がしばらく続いていたが、夕方に一本の通報が入ってきて、空気が変わった。

「五丁目の湾岸地帯に獣化犯罪者が出現したそうです！廃倉庫で麻薬の密売が行われている最中、その密売人の一人が獣化し、暴れている模様！」

なんとか冷静さを取り戻していた徳子が最初に通報を受け、皆に報告する。

状況を聞き終えた氷群は、この派出所から工業地帯まで距離があると判断し、外に止めていた専用のオートバイに乗って間髪入れずに出発していった。

杉彦を置き去りにして。

「うえ！？ちよちよちよちよちよと！！！」

あわてた杉彦は体が勝手に動くままに先ほど冴子が巡回で使っていた自転車に乗り込み、これまた凄まじい勢いで氷群を追いかけていつてしまった。

あまりに一連の流れが速すぎて、すっかり乗り遅れてしまった婦人警官の二人。

「えっ、あ！ちよ、ちよと待ちなさいあなた！！私のイケメンホイホイ号に勝手に乗っていかないでよ！！逮捕するわよ！！」

怒り出す冴子。

「せ、先輩。自転車に名前つけてたんですか？」

「そうよ！？悪い！？」

「い、いえ、いいんですけど……イケメンホイホイ号で……」

「とにかく追うわよ！！イケメンホイホイパトカーの手配！！」
「パトカーにもか……」

【13】主人公の悲劇

時を遡り、再び幾久の時代へ。

想い人である陽黄を一生賭けて守り抜くと誓っていた幾久は、日夜、それこそ死にもの狂いで剣術の修行に明け暮れていた。

罪人や妖を退治するという將軍様からの要請も積極的に請け負い、幾久は十六歳にして將軍様の正式なる側近の座に就くことが出来たのだった。

そして来年には陽黄も將軍様の元へ側室として迎えられることが決まっており、これで未来永劫、陽黄の近くにいられることが約束された。幾久はいたく喜んだ。

某日、側近就任の儀を無事終えて意気揚々と歸路に着く幾久。

帰ったら陽黄は自分を褒めてくれるだろうか？ 美味しいご飯を用意して暖かく迎えてくれるだろうか？

など様々な期待を膨らませていた。

將軍様のお屋敷から武稽古場まではかなり距離があり、早朝に側近就任の儀が執り行われたのだが、武稽古場に戻ったのは夜も更けた時刻になっていた。

それでも自分の帰りを師範代や陽黄、稽古仲間が迎えてくれるだろうと幾久は軽く考えていた。

だがしかし……

×

氷群たちが向かった湾岸地帯は、杉彦の住む街の中で一番東側にある地域だ。

この街は大きな港を擁しており、そこで輸出入される荷物を管理する巨大な倉庫が一面に広がっている。

中には使われなくなった倉庫も存在し、たびたび犯罪の温床にな

つていたりする。ただ、獣化犯罪に関して言えば、ほとんどが民家や店舗、または女性を狙った犯罪者が獣化するという事件が多く、こうした密売の現場から獣化犯罪者が現れることは今まで例を見なかった。

とはいえ、廃倉庫なら一般人が巻き込まれる恐れがほとんどないと予見できるので、今回が杉彦にとってハードルの低いスタートとなりそうだ。

一足先に現場に到着した氷群。

まずは犯人がどこにいるのか探さなければならない。広大な敷地の中、氷群はかすかな騒音を頼りに、犯人がいるであろう場所に見当をつけて再び走り出す。

少し遅れて杉彦も現場に到着した。杉彦の場合は犯人の居場所の特定より、氷群が向かった方向を定めることで、一気に氷群との間合いを詰めた。

そして二人が犯人の居場所につけたのはほぼ同時となった。

おそろべし杉彦の愛のパワー。

ちよつと前まで四キロをバタバタで走っていたとは思えない。

こうしてなんとか合流に成功した二人。まず氷群は犯人が潜んでいる倉庫に目を向けながら、作戦を杉彦に告げる。

「まずは私が扉を開けて中に入る。君は入り口で待機していき
れ」

おそらく氷群は杉彦の抜刀術を評価して、入り口での待機を命じたのだろう。

氷群自信、杉彦の抜刀術を生で見えて、その破壊力の高さに一目置いていた。

更に初めは技術の技の字もなかったが、ここまで驚異的なスピードで技術を習得してこれた杉彦を、氷群は単純にすごいと思っているし、尊敬に値するとも思っている。

それに周りが杉彦について良くない噂をしているのを知ってはいたが、彼の純粋な成長を見続けてきた氷群には、彼の表面的な問題

点を気にすることは単純に出来なかったのだ。

このような氷群の想いには全く気づかない杉彦は、ガチガチになつていた体を必死になつてほぐし、もの凄い勢いで首を上下に振つた。毎度毎度、氷群の前では声を出そうとする度に奇声を発してしまつたため、なんとかジェスチャーだけで意志を示そうという本人にとっては苦肉の策だつた。

それが今は逆に犯人を刺激しない方法となつていて、氷群は若干満足げに、杉彦の返答を見てコクツとうなずく。

そのままゆっくりと扉に近づく氷群。

場に緊張感が走り、杉彦は思わず生唾を飲み込む。

一通り安全を確認した氷群は、勢いよく扉を開いた。

すると、中から酷く鼻につく臭いが溢れ出てきた。かなり鉄臭く、その原因はそこら中に倒れている人間から流れ出している血の臭いだとわかつた。

その周りには大量の白い粉がばらまかれており、どうやら倒れている人間たちは麻薬の密売に関わつた人間たちで間違いなさそうだった。

そして屍たちの中心に一段と体の大きな人間が、座り込みながら粉をすうすうと吸い込んでいた。そいつの頭は、大きな角が二本生えた牛のような状態になつていた。上半身は今まで現れた獣化犯罪者よりも巨大に隆起しており、まさに闘牛の如く凶暴な姿に変わった犯人だつた。

しかし、当の本人は麻薬に夢中なのか、氷群が侵入してきたのにも全く気づいていない。

相当な緊張感をもつて挑んだだけに、氷群も杉彦も拍子抜けしてしまつた。

(……ま、こういうこともあるんだろうね)

杉彦はすっかり気を抜き、氷群の後に続いて倉庫に入ってきた。

そこで突然、犯人の鼻息が荒くなった。それに杉彦が違和感をおぼえた瞬間、とてつもない勢いで犯人が杉彦の方へ向かつて走り出

してきたのだ。

×

やっとの思いで武稽古場に戻った幾久。

「幾久、只今戻りました！」

帰宅したことを告げ、皆の待っているであろう茶の間に向かう。しかし、皆が集まっているのならば少し騒がしくてもいいものの、なぜか屋敷内は異様な不気味さ包まれていた。

少々不安を感じる幾久。

それも束の間のこと、茶の間にはちゃんと行灯の明かりが点いていて、幾久は胸をなで下ろす。

物音を立てず、急に入っていけば皆は驚くだろうと、幾久は内心笑いながら勢いよく茶の間の襖を開け放った。

ところが、そこには陽黄しかいなかった。

生き残っていたのは。

×

あまりの勢いに、杉彦は反応出来なかった。

だがこうした場面でも冷静さを失わない氷群が、杉彦の前に素早く出て犯人の突進を刀で押さえ込んだ。急に目の前に現れた氷群の姿を見て、ようやく状況を理解できた杉彦。

だが氷群に対する緊張と、以前初めて獣化犯罪者に殺されそうになった時の記憶が合わさって、体に全く力が入らない。

「逃げる……！」

氷群が大声で避難するよう促すが、その声も今の杉彦には届いていなかった。

氷群は氷群で、これまで合間見えてきた獣化犯罪者に比べて段違いの力を持った相手に、少し押され気味になっていた。

このままだと力負けしてしまうと感じた氷群は、なんとか相手の力を横合いに受け流した。犯人は勢いのままに斜め後ろの壁を突き抜け、向かいの倉庫の壁に直撃してようやく止まった。

その隙に、氷群は杉彦の肩を掴んで揺さぶった。

「おい！大丈夫か！？」

しかし、杉彦は呆然とした表情のまま反応がない。

そもそも無理のあることだったのだ。

つい最近まで杉彦は単なる一般人だったのだから。

いくら氷群に賭ける情熱が垣根なしにずば抜けていたとしても、たったそれだけで心も体もそう易々と鍛えられるものではなかったのだ。言わば氷群への執着心は単なる麻酔に過ぎなかった。

今、本当の恐怖に直面し、これまでの躍進は単なる幻だったのだと杉彦はここでようやく実感した。

更に言えば、どうしてこんなことになってしまったのだろうかと思えてきた。

最初に自分が望んでいた【氷群に告白する】という目標とは、遠くかけ離れた場所に来てしまっている気がした。

やっと彼女に手が届く場所まで来たのに、結局いつものように陰でコソコソやるだけで終わってしまう。

ここまで過ごした怒濤の日々は何だったのか？

もう考えることすら面倒くさい。

怖がることも、愛することも面倒くさい。

全てがどうでもよくなってくる。

完全に暗闇に落ちてしまった杉彦に、ひたすら懸命に話しかける氷群。

だが時間は猶予をくれない。

大したダメージを被っていない犯人が、再び二人に向かって突進してくる。

いったん杉彦の正気を取り戻すことを止め、また相手の力を受け流そうとする氷群。ここですぐ両断してしまうのはそう難くないや

り方だが、相手の力の強さを考えると、勢いが殺しきれずに、杉彦に被害が及んでしまうことを氷群は恐れた。

何とか相手を杉彦のいる場所から遠ざけようと力一杯、刀を振るう。

今度は横合いに相手を吹き飛ばすことが出来た。横倒しになり、上半身が重いせいではなかなか起き上がれない犯人。

よし、これで仕留められると、氷群は犯人に向かっていく。

それをただただ見守る杉彦。結局、自分は彼女を見ていることしか出来ないのだと、無力感に身も心も委ねてしまっていた。

だが、次の瞬間。

杉彦に大きな変化が訪れる……

×

「……はあ？」

幾久は自分でも気づかぬうちに、情けない声を出していた。まだ短い半生だが、こんなにも理不尽過ぎる光景を見たことがなかったからだ。

目の前に広がるのはどろどろとした血の海。

そこに浮かんでいるのは、師範代を始め、一緒に修行をしてきた仲間たちだった。

そして、部屋の一歩奥に、髪の毛を掴まれて吊し上げられている陽黄が見える。

これは一体どういうことなのか？

幾久には全く理解し難い光景だった。

しかも、陽黄の髪を掴んでいるのは、妖ではなくただの人間のようだ。ただし、かなり体が大きく、熊や猪の体毛と固く編み込まれた縄で作られた服を身にまとい、片手で巨大な斧を持っている、どうやら流浪の山賊らしかった。

どうやら陽黄の髪を毛を切ろうとしているようだ。

確かに最近、この先の村々で凶悪な山賊が暴れ回っているという噂を聞いてはいたが、まさか自分の武稽古場で、しかも貴重な輝く髪を持つ陽黄が狙われるというところまで考えが至らなかった。

完全に油断していたのだ。

だが今更何を考え出しても遅い。

かろうじて息だけをしているが、完全に意識を失っている陽黄。その陽黄の髪を握り締めている山賊は荒い息を吐いている。

このまま黙っていればどうなるか。

幾久は残酷な予感しかしなかった。

x

素早い動きが封じられた犯人に、氷群はゆっくりと近づく。

また足の腱を斬ってしまえばいい。そう思い、氷群は刀を水平にかまえる。

チェックメイト。

誰もが氷群が勝つ瞬間を目撃できると思える状況。

そこで予測不能の事態が起きる。

遠くで見ていた杉彦には何が起きたか全く理解できなかった。

急にダァン！という大きな音がした瞬間、氷群が道に崩れ落ちたのだ。なんと、氷群が刀を振るう直前、暴れていた犯人が急に動きを止め、おもむろにズボンのポケットから拳銃を取り出したのだ。

おそらく、まだ普通の人間だった時から持ち合わせていた拳銃だろう。

しかし、今まで出現してきた獣化犯罪者は、知能すらも獣化していて、そのほとんどが本能のままに暴れることしかできていなかった。

それがまさか、拳銃という文明の利器を使うことがあるとは、氷群もまったく予想していなかった。

軽々と銃を手にした犯人は、ニヤつと笑つて、なんのためらいもなく氷群に向けて発砲した。あまりにも予想外な出来事に氷群は全く反応できず、無抵抗のまま凶弾を受けた。

ふらふらと氷群に近寄っておそろおそろの様子を窺うと、氷群の胸の真ん中に穴がぽっかりと空いていた。

それを杉彦が見た瞬間、自身のありとあらゆる箇所がドス黒い感情で覆われた。

×

「ッヒッヒッ。髪さあ切」 つだら、あとでたっぷりかわいがってあげらあなあ」

幾久は自分の中に得体の知れない奇妙な生き物が入り込んできたような錯覚に陥った。そして山賊に向かつて、幾久は叫んだ。

山賊はそんな幾久の存在を無視して斧を大きく振りかぶり、勢よく陽黄の首に叩きつけた。

走馬燈の如く、陽黄との思い出がよみがえり、そして心に描いていた希望の未来までもが続けて頭の中を流れ、最後は暗く深い闇に全て落ちていってしまった。

しかし意識は飛ばず、ただひたすらに心が酷く痛い。

×

この瞬間。

杉彦と幾久。

杉彦の視界が開けると、目の前にいたはずの獣化犯罪者が粉微塵になっていた。

血の如く真つ赤な長髪に、全身に闇にも劣らぬ黒さをまとい、ギラメラメラとした紅黒い光を漂わせる刀を持った、長身瘦躯の侍。

歲殺神邪王羅刹

【14】主人公の迷い

杉彦は三日三晩自分の部屋籠もり続け、ただただ記憶の海を漂流していた。

あの後、杉彦の目の前に現れた謎の人物は、杉彦の方を振り向くと、邪悪な笑みを浮かべてこう告げてきた。

「我、幾百ノ時ヲ経テ、下界ニ戻レリ。我ガ依代ニ成リシ貴様。我ニ従イ、コノ世ノ全テノ殺氣ヲ我々ノモノニシヨウゾ」

そう告げ終わると、謎の人物は砂煙のようになり、杉彦の中へと入り込んでいった。

ここまでの短時間で、理解不能な出来事が起き過ぎていた。今杉彦の腕の中でぐったりとしている氷群でさえ、夢か現か、杉彦には判別がつかない。

「おめでとう、杉彦お」

不意に後ろから声がした。

その声を聞いた杉彦はハッと虚ろだった意識を戻した。そのくらい、実に近い人物の声だった。

杉彦と血のつながった実の祖母であり、対獣化犯罪組織シルヴァー・ハントの立ち上げ人。ビッグ・マミーこと、隙有真知子、その人である。

いつ現場に到着したか定かではないが、真知子はここまでの一部始終を見ていた風に話し始めた。

「氷群にやあすまねえと思ったが、おかげでやっとおいで下さったねえ」

「・・・・・・・・・・・・・・・・あ？」

杉彦はぐちゃぐちゃになった脳内を必死にまとめ、やっこの思いで真知子の言っていることの意味がわからないことに疑問を感じることができた。

寝ている間に落書きされて酷い顔にされた時のような表情の杉彦に、真知子はいつものように飄々と話を続ける。

「杉彦、おめえ、さつき出てきたあの方が誰か知ってるかい？」

まあどうせ知らないだろうと言わんばかりの表情で真知子が問いかけてくる。

一体、ばあちゃんは何を言いたがっているのだろうか？

「あのお方はねえ杉彦。おめえのご先祖様なのさ」

「・・・・・・・・」

まったく予想だにしない真知子の話だが、杉彦は黙って聞くことしかできなかった。

あくまで数々の事実を浮上させて杉彦の脳内をかき乱し続けるというのなら、もうそれに抵抗しようという余力など杉彦には残っていなかった。

真知子は反応のない杉彦に構わず続ける。

「ご先祖様は幼名を幾久といって、剣の達人だった人でねえ、だがある日突然、好きだった女の子を山賊に殺されちまったんだ。その時にご先祖様の中で鬼神のような力が生まれた。それでああなんちまったのさあ」

そういえば・・・・・・・・と、杉彦は先ほどの真つ黒になった心の中で、一人の少女のために一生懸命剣を振るっている少年の記憶がうつすらと入り込んでいたことを思い出した。その行動は、どこか自分と重なるところがある。

そして、この残酷な現実さえも・・・・・・・・

「それからご先祖様は人を殺し続けた。特に人や妖を殺したいという殺気に溢れた人間をねえ。それ以来、人々は彼を畏怖の対象としてこう呼んだ。人斬り鬼、羅刹、とね」

「・・・・・・・・」

そんな恐ろしい史実があったというのか。

杉彦は改めてこの異様な状況に陥っていることに戦慄する。

「まあそんな鬼は鬼でも死ぬ時は死んじまう。だがたくさんの女と

子供を作ったおかげで、多くの子孫を残すことができた。そんな
いづれまた復活してえとご先祖様は思ってたんだろうねえ。そんな
で、ぴったり合う依代におめえが選ばれたってえわけさあ」

わけさあと言われても、ところどころ説明として抜け落ちている
ところがあり、相変わらず杉彦は理解不能な状態が続いている。

なぜ、この時になってご先祖様は杉彦の前に現れたのか？

そして、まるでご先祖様の出現を願っていたかのように祖母は楽
しげに話すのか？

杉彦が混乱している間に、氷群の救助のために救急車が駆けつけ
ていた。

「ひ、氷群センパイ！！しっかりして下さいす！！氷群センパイ
！！」

救急車と共に現れた飛鳥あすかが氷群に必死に声をかける。

それをただ呆然と見送る事しかできない杉彦。

現場の処理もあつと言う間に片付き、事件は杉彦の受けたダメー
ジとは裏腹にあっけなく幕引きとなった。

追憶が途切れ、再び現実に取り戻される杉彦。とにかく突きつけ
られた現実が重すぎる。

氷群に対する想い。

人斬り鬼だったという先祖の存在。

祖母の思惑。

どれも容赦のなく杉彦の心を鋭い刃で突き刺してくる。

氷群の容態だが、医師の見解では幸いにも弾が臓器に当たること
なく貫通していて、大事には至らないということだった。だがそれ
も杉彦の慰みにはならない。そもそも彼女をこんな目に遭わせてし
まったのは、自分の無力さが原因なのだから。たとえ彼女がまた普
通に復帰したとして、もうどんな顔をして会えばいいのかかわからな
い。

それに今、杉彦の中には羅刹という伝説の人斬りだった先祖の魂

が宿ってしまったているらしい。正直、自分の先祖に人斬りがいたこと自体、とてつもなく受け入れ難い事実だ。更にその先祖の魂にとりつかれるなんて……

今のところ、依代にされた後で特に変化はないのだが、いつ羅刹がまた顕現してくるかわからない。万が一、羅刹が氷群にも危害を加えることがあったら、もう杉彦の生きている意味がなくなってしまう。

そしてもう一つ、大きな違和感の要因となっているのが、祖母である真知子の杉彦に対する意味深な言動だ。一つ屋根の下で暮らしているにも関わらず、滅多に会うことのなかった祖母。

それが知らぬ間に警察を辞め、獣化犯罪者を抑制するための組織を立ち上げていて、そこへ運動神経ゼロの杉彦を加えようとしたこと。

杉彦が氷群のことをストーカーしていることを知った上で、杉彦を氷群の戦闘パートナーに着任させたこと。

先祖が伝説の人斬りだったという史実を知っていて、その先祖が現れて自分の孫にのりうつたことに驚かないこと。

祖母の一連の行動には謎が多い。特に、祖母は羅刹が杉彦を魂の依代にすることを最初から予見していた風がある。

一体、祖母は何を考えているのか？

杉彦をどうしたいのか？

(……あー……駄目だ。考えても何も変わらない……)

しかし、ここからどう動けば良いのかわからない杉彦は、ただただ、冷たいベッドの上で考えを堂々巡りさせることしか出来なかった。

そこへ、思いもよらない来訪者が……

「兄貴いゝ起きてる？入っていい？」

急に部屋のドア越しから妹、広美の声がした。

最近、杉彦はシルヴァー・ハントの訓練に明け暮れていたため、

ほとんど広美と顔を合わせていない。しかも杉彦と同じく、氷群が大好きな広美と顔を合わせるのは非常につらかった。

杉彦はそのまま無視しようと寝たフリをしていたが、ドアの鍵を閉め忘れていたことに気づく。気づいたが時すでに遅く、無遠慮に広美が入室してきた。

そこで杉彦は驚愕する。

広美がなんと、ぴよん太を腕に抱えていたからだ。

「うわあああつ!!」

あまりの衝撃に思わず驚嘆の声を出してベッドから跳ね起きる杉彦。

「どうしたの？」

杉彦のリアクションの意図が読めず、広美は普通に疑問を投げかけてくる。

「そ、そのタ、タ、タヌキは………?」

ぶるぶる震えながらぴよん太に向けて指を指した。

「あ、なんかね、このタヌキが玄関の前でうちに入りたそうにしてたからかわいいなあと思って連れてきちゃった」

や、連れてきちゃったって………こいつがしゃべるタヌキだと知ったらさぞや広美は取り乱すだろうと杉彦はドキドキする。

「ご無沙汰ですぜダンナ!!」

そんな杉彦の気も知らず、普通に話し出すぴよん太。

「わー! わー! つーかいのかしゃべって! ?」

妹より先に取り乱す杉彦。

「は、急に何言つてのよ兄貴?」

しかし、肝心な広美は、急にわけのわからないことを言い出した杉彦に違和感を抱いていた。

「や、え、べ、べつに?」

「ったくー、最近シルヴァー・ハントの仕事が大変だったからって、三日間寝込んでたからおかしくなったんじゃないの?」

「あ、え、あ、そ、そそつ、そうかもなアハハアハハ」

なんとか笑ってごまかす杉彦。

どうやら広美にはぴょん太がしゃべっている言葉は聞こえてないようだ。以前、告白の練習を手伝ってもらった内気赤良うちきあからという女の子には聞こえていたみたいだが、個人差でもあるのだろうか？

謎がまた増えて頭がグアングアンする杉彦。そんな杉彦の状態などお構いなしに、またしゃべり出すぴょん太。

「その節は失礼しやしたダンナ！！またあっしがお嬢さんへの告白を手伝わせていただきやすんでダンナ！！」

「しー！それはもういいから今はしゃべんなー！」

小さくかすれた声でぴょん太に話しかける杉彦。

「だからさっきからおかしいんだけど！」

「キニスナツ！！マイシスター！！」

「その呼び方キモイからやめて」

「でれかしーが足りませんぜダンナ！！」

わーわーとやり合う二人と一匹。久々に迎える杉彦のかつての日常。

そこから醸し出される柔らかい空気が、不意に杉彦の冷たく重かつた心を少しだけ癒す。

「んーなんだか楽しそーねエー！私もま・ぜ・テ」

そこへまたしても唐突な来訪者が現れた。

目に痛いピンクの長髪と網タイツ。忍装束とスケバン制服を併せ、かつ何故か大人のセクシーさが強調されたデザインの服装は、間違はなくシルヴァー・ハントの伊賀嵐だった。

しかも天井から逆さで宙吊りという忍者といえは忍者らしい登場の仕方だ。

「へきやあああああああああ！！ぐはあ！！」

当然驚く杉彦。

勢い良く後ろに退けたため、壁にしこたま頭をぶつけて気絶した。それを気にする風もなく床に降り立つ伊賀嵐に、広美は目をギラつかせ、

「も、もしかして、シルヴァー・ハントの伊賀嵐殺芽様いがらしあやめですよ？」

とまるでアイドルグループのメンバーに会った時のような声のかけ方をする。

「ふふッ、そーよーオ！初めましてかな？広美ちゃん」

「は、はい！！ずっとお会いしたかったんですう！！」

言葉の勢いのままに何故か殺芽に抱きつく広美。

とにかく広美はイケメン、美女が大好物だったりする。目の前に美味しそうなエサがあれば、ワナだろうがなんだろうが、まず食いつかない手はない。

「ごめんねーエ、私も忙しくって本部にはあまり寄らないのよー」
「いいんです！！いいんです！！こうしてわざわざ私の家まで来て下さったんですからー！！」

広美は抱きつきつつ、殺芽のいろんなところをまさぐるうする。

「もーオー広美ちゃんは手が早いゾ あとでゆっくりニヤンニヤンしてあげるからねーエ？」

「にやああああああん！！」

完全に壊れ出した広美。

杉彦と同じような属性でも、インドア派な杉彦に対して、広美はアウトドア派といったところか。

そんなピンク色のバラが咲き乱れそうな状況になって、杉彦はようやく意識が戻って体を起こすことができた。

「あら、杉彦くん。おめざめエ？」

「いつあつあ．．．．．って、あれ？あの．．．．．失礼ですがどちら様ですか？」

打ち所が悪かったわけではない。

杉彦と伊賀嵐はこれが初対面なのだ。氷群と初めて出逢った時、その場に現れた伊賀嵐の吹き矢によって眠らされてしまったため、当人同士顔を合わせていなかったりする。

「あ、そういえばあの時はごめんなさいねッ！氷群ちゃんに性に飢

えた猛獣が襲いかかっていると、思わずアナタをゾウさんも一発で眠らせちゃう麻酔入りの吹き矢で眠らせちゃった」

「はい!？」

そんなことは初耳だった。

そもそもどつからどう見ても普通の人間のはずの杉彦にそんな劇薬を打ち込んでいたとは……

それを考慮に入れるとトンデモなことだったのだと、杉彦は恐れ戦く。

「……まあい、今更それはいいんですけど、いきなり現れてどうしたんですか？」

なんとか心を持ち直して話を本筋に戻す杉彦。

「あーそーそーウ、アナタのオバアサマに頼まれて仕方なくアナタの様子を見に来たのよッ ま、元気そうで良かったわアー」

すっかり懐きまくっている広美の頭をなでながら、殺芽はここにきた理由を語った。正直当人はあまりやる気はない様子だが、殺芽の回答に、杉彦は嫌な疑問を感じた。

もし祖母が自分の心配をしているのなら、なぜ自ら見舞いにこないのか？

これまで関わりは少々薄かったが、多少なりとも自分を可愛がってくれていたように杉彦は思っていた。

ここまで精神的にまぶしくなったことは今までなかったし、孫が悪い状態の時こそ、支えてやろうという気持ちはないのか？

杉彦がだんまりしていると、不意に杉彦のケータイが鳴り出した。杉彦はおもむろに通話ボタンを押すと、

<よお色男お。いつもの元気は戻ったかい？>

という真知子の声が聞こえてきた。

この謀ったように電話をかけてくるあたりが、どうにも杉彦に変な気を起こしてしまう。

「……なんで直接言いに来ないんだよ」

杉彦は急に孫らしく、子供っぽい声で疑問を投げかける。

<・・・・・・・・・・もしかして、心配してもらいたかったのかい？はっ、まだまだいつちよまえのガキンちよだねえ>

鼻で笑う真知子。それが余計に杉彦の神経を逆撫でする。

「だってわけがわからないことが多すぎるんだよ！！急に戦いに参加して、いきなり人斬りの先祖が出てきて」

<おめえが望んだことだろ！？>

強い口調だった。

この真知子の一言に、杉彦の激情が一気に冷める。

<おめえが氷群に近づきたいってえ望んだから、その通りにしてやつたんだろうが。むしろ感謝されたいぐらいだねえ>

「・・・・・・・・」

何も言い返せない。全くもって真知子の意見が正しい。それを先ほど反省したばかりではなかったのか？

自然と、杉彦の頬に涙が伝っていた。

ここまで衝撃的なことの連続で、泣くよりも恐怖に縛られて怯えているだけだった。それが真知子の叱咤によって、緊張の糸がプツツと切れたようだ。

杉彦の微かな嗚咽を聞き取った真知子は、優しくこう告げた。

<みんな知ってるんだよ。おめえが純粹に氷群を好いてることを>

「へ？」

<なんで私が氷群の尻ばっか追っかけることしかできねえおめえを氷群の相方の選んだと思うよ？ん？>

黙る杉彦。

<おめえの氷群に対する姿勢がいつも真剣だったからさ。赤の他人様から見りゃあおめえのやってるこたあいけねえことだと思うだろうよ。でも私やウチの一部の人間はおめえが陰でコソコソ氷群を追っかけてるのを見てて思ったよ。いつもおめえの目は真剣で、情熱的だったってな。氷群が嬉しい時、悲しい時に一緒になって感情を揺さぶっていた。あいつは不器用な奴だ。いつも一人でいて、誰とも心を通わさねえ。そんなあいつに一番近づくに値するのはおめえ

しかいねえ。そうだろ、伊賀嵐？>

電話からの質問で聞き取りにくいはずだが、伊賀嵐は真知子の質問を理解したのか、少し拗ねたようにそつばを向く。

それが逆に真知子の問いを肯定しているように杉彦には思えた。また目頭が熱くなる杉彦。

<それに、ここにもおめえの理解者がいるよ>

真知子がそう言うとしの間が空き、別の人物が通話に出た。

<杉彦さんすか！？氷群センパイの元・パートナーの美空飛鳥みそらあすかつす
！！>

美空飛鳥・・・そういえばそんな娘がいたなあと杉彦はかすかな記憶から思い出す。

<た、大変なんす！！今氷群センパイが病室から抜け出しちゃったんすよ！！>

「ええ！？」

<どうや、北部にあるショッピングモールで獣化犯罪者が出現したっていう情報をセンパイが耳にしちゃったらしいんす！！まだ絶対安静の容態なのに・・・>

杉彦の顔がみるみる生氣を失っていく。飛鳥の話が事実だとしたら、氷群は間違いなくそのショッピングモールに向かったはずだ。

このままだと本当に氷群の命は・・・

<杉彦さん、至急氷群さんを追いかけて下さいっす！！>

「え、・・・俺が？」

<そうっすよ！！今の氷群センパイのパートナーはあなたじゃないっすか！！>

氷群のパートナー・・・その地位を、これまでどれだけ熱望してきたのだろう。しかし、それが今では杉彦の胸に重くのしかかってくる。

はたして、自分が氷群のパートナーを名乗る資格などあるのだろうか？

<悔しいっすけど、氷群センパイのこと一番考えてるのって、杉彦

さんすから・・・・・・・・・>

「えっ」

急に小声になる飛鳥。だがその言葉は、杉彦の耳にしっかりと届いていた。

<アタシも今から至急向かいますっす！！>

そう飛鳥は言い残して、真知子の部屋を出ていった。再び、真知子が通話に出る。

<ま、皆、素直じゃないけどねえー>

少し笑ったように話す真智子。

<さっ、行きな杉彦。余計なことは考えなくていい。ただ氷群のこだけを考えな>

「や、でも・・・・・・・・・」

まだじれる杉彦。もう一つ、胸につつかえていることがあるのだ。
<・・・・・・・・・ああ、そうだったねえ・・・・・・・・・杉彦。ご先祖様のことは気にするな>

「え？」

<おめえが望む通りやりやあい。おめえも感じてたんだろう？ご先祖様とおめえの境遇は似てるってことを>

「・・・・・・・・・でもさ、もしまたご先祖様が出てきたら今度こそ氷群さんを失うことになるかもし」

<大切なのは殺意より愛意だ。殺すより愛でろってな>

そう言い残して、真知子は一方的に電話を切った。

その隣で、火蔭がじつと二人の会話を聴いていた。

「そのようなアドバイスで大丈夫でしょうか？もし危ないようでしたら私も現場に向かいますが・・・・・・・・・」

幾ばくかの不安が滲んでいる火蔭の声色。だがそれをはねのけるように、真知子は満面の笑みを浮かべる。

「大丈夫だよ火蔭。あの子は強い。なんせ私の孫だからねえ」

自慢げに話す真知子。

「それに火蔭も見たと思うが、あの子にはあの憎ったらしいタヌキ

が付いてるしねえ」

「・・・・・・・・・・はあ」

これまたどういう根拠か、真知子はその時杉彦の後ろで怯えていた謎のタヌキに何かを期待しているようだ。

火蔭にはその根拠がさっぱりだったが、またしても自信満々に話す真知子を信用することにした。

「まあよく見ておきな火蔭。『奇跡』ってやつは起こせるもんだってねえ」

真知子はまた美味そうにキセルをふかす。その吐き出した煙の中に、真知子は自分の望んだ未来が見えているかのようだった。

【15】主人公の奇跡

すでにショッピングモールには人気がなかった。その代わり、辺り一面が火の海と化していた。

恐らく獣化犯罪者が暴れた際、どこかのガス線を破壊してそこから発火してしまったのだろう。燃え盛る炎の中を、犬・猿・雉の形に変化した三人の獣化犯罪者が闊歩していた。

どうやらこの三人はショッピングモール内の店に強盗として押し入ったらしい。金品をひと通り盗んだはいいが、獣化したことによつて知性を失い、ひたすら暴れ回るだけの怪物と化してしまっていた。

そこへ、一台のバイクが颯爽と駆けつける。

氷群・ハイリツヒシュタインは、少しよろめきながらバイクから降り立った。

麻酔を打って痛みを抑えてきたはずだが、かすかに残る胸の痛みに耐えつつ、うまく機能しない脳を懸命に働かせていた。

本来ならまともに動くことすらままならない状態で、普段相手にすることのない三人の獣化犯罪者に立ち向かおうというのだ。

どう考えても無謀すぎる行動だが、氷群は毅然と立ち向かおうとする。

杉彦を新しいパートナーとして迎えた最初の任務で、あれだけの大失態を犯したのだ。

自分が倒れた後、犯人は真知子が対処したと聞かされたが、もし真知子が来なければ間違いなく杉彦は殺されていた。パートナーを危険な目の遭わせることが一番の愚行であると氷群は考えていただけに、自らの失態は万死に値すると思つた。

だからこそ、もうパートナーを受け入れることはしない。

どんなに酷な状況であっても、もう誰も巻き込まないように一人で立ち向かう。そう氷群は誓つたのだ。

よろめく足でなんとか踏ん張り、ゆつくりと刀を抜く。

おそらくこの現場にたどり着いたのは自分が一番だろう。今すぐ事件を解決すれば誰も傷つけなくて済むはずだ。

氷群はしっかりと刀を構え、深呼吸し、獣化犯罪者と炎の海へと突っ込んでいった。

「おおおおおおおおおおおおおおお！！」

杉彦は自宅にあった自転車で猛ダッシュしながら、ひたすら暗示をかけまくっていた。

確かに祖母の言う通り、余計なことを考え過ぎていたかもしれない。求めていた答えはもっとシンプルだったはずだ。

――氷群が好き――

そのたった一つの想いでここまでこられたはずだ。

今更どんな障害が来ようとも関係あるものか、と。

「その通りですぜダンナ！！」

「だーかーらーさー、また俺の心を読むなって、って、おわあああ！！」

危つく滑りそうになる杉彦。いつの間にか後ろにぴょん太が乗っかっていたのだ。

「おま！いたのかよ！！」

「当然ですぜダンナ！！ダンナがお嬢さんに告白するまでどこまでもお供しますぜダンナ！！」

「告白って、今はそれどころじゃないだろ！！」

「何をおっしゃいますダンナ！！お嬢さんが窮地に立たされた今、そこからお嬢さんを救い出すことで、深い絆が生まれ、晴れて二人はお結ばれになるんですぜダンナ！！」

「・・・・・・つまり囚われのお姫様を王子が助けてハッピーエンドみたいな感じってこと？」

「そんな感じですがダンナ！！」

「・・・・・・それってどうなの？」

あまりにもベタ過ぎる展開だ。しかも童話のようにハッピーエンドの保証などない。

「もうここまできたらやるしかないですぜダンナ!!」

「……………」

全力で自転車を漕いでいる間に、テンションもどんどんおかしくなっていく。もうこの勢いのままで行くしかない。杉彦はそう思えてきた。

「……………そうだな。やるしかないか!!」

「その意気ですぜダンナ!!」

「うおおおおおおおお!!」

杉彦は更に漕ぐスピードを上げる。

「そっちは西部ですぜダンナ!!」

なんとか現場に到着した杉彦とぴょん太。

周りの建物には炎が回っており、かなり危険な状態だった。

杉彦の中で一気に緊張感が増す。このどこかに氷群はいるはずだ。早く見つけねば彼女の命が危ない。

「氷群さあああああああん!!」

「お嬢さあああああああん!!」

煙を吸わないよう体勢を低くして叫ぶ杉彦とぴょん太。

ぴょん太の声が氷群に届くのか疑問だったが、そんな未知の可能性にも賭けたいような厳しい状況だった。

建物内には入れそうになく、周りから探っていくと、中央広場のようなところで、黒い影が揺らめいているのが見えた。

杉彦は懸命に近寄ってみると……………

「ひ、氷群さ……………!!」

そこにはボロボロの状態となった氷群が床に横たわっていて、周りには三人の獣化犯罪者が氷群を囲うようにして立っていた。

どう見ても絶望的な状況に杉彦は絶句し、足がすくんでしまう。

ここまでなんとか保ち続けた氷群への想いも一気に揺らぐ。そし

て同時に心の奥に潜んでいた羅刹の魂が騒ぎ始めた。「我ヲ顕現セヨ」と。

しかし、ここで羅刹を呼び出して、氷群を巻き込まないという保証はない。

それにもう一度心が闇に支配されたら、もう二度と元には戻れない気がした。

「くうううううああああああああ！！！！」

杉彦は自分の中から溢れ出しそうになるとす黒い感情を押さえ込もうと、必死に力を入れた。

そして思い出す。

氷群と出逢えたあの奇跡の瞬間を。自分を救い出してくれた天使の優しさを。そしてここまで積み重ねてきた彼女との数々の思い出を（一方的な）。

二つの感情が杉彦の中で激しくぶつかり合っている。まるで小惑星同士の衝突の如くだ。

だが、氷群の傷ついた姿を改めて見た瞬間、羅刹の殺意が一気に膨れ上がる。

「がああああああああああ！！！」

杉彦は気が遠くなりそうになった。

そこを境界線の一步手前で踏ん張り、祖母の言っていたあの言葉を強く、強く、自分の心に無理やりねじ込んでいく。

（殺すより愛でろ、殺すより愛でろ、殺すより愛でろ………）
想い人を殺され、殺意の塊となってしまったご先祖様。

だが、彼が自分と同じように、今でも想い人への愛情を無くしていないのであれば、この杉彦の強い想いに呼応してくれるかもしれない。

（ご先祖様。あなたのように怒りと殺意に負けたりしません。今度こそ、悔いの無いように、今、氷群さんに告白し、彼女を守ります！！）

今こそ、彼女への恩を返すと同時に、ありったけの想いをぶつけ

る時だ。

そこへ杉彦の様子窺っていた猿の獣化犯罪者が、地面に落ちていた建物の瓦礫を杉彦に向けて投げつけてきた。

自らの感情をコントロールするのに必死だった杉彦は、それに全く反応できなかった。このままでは確実に瓦礫が直撃してしまう。

最悪の事態が差し迫ったその時、

「あぶないですぜダンナ!!」

なんと、飛んできた瓦礫をぴよん太が杉彦の前に飛び出して、受け止めたのだ。

しかし、瓦礫の勢いで吹き飛んでしまうぴよん太。

「え?・・・.. ぴよん、太? ぴよん太ああああああ!!」

杉彦は急いでぴよん太に駆け寄った。ぴよん太の傷はかなりの深く、致命傷だった。

「ダッ、ダンナ・・・.. ご、ご無事で・・・..」

「いい! いいからしゃべるな!!」

感情を爆発させる杉彦。

「あ、相、変わらず、スキ、だら、けです、ぜ・・・.. ダン、ナ」

「・・・.. ごめんな」

杉彦の目から自然と溢れ出す涙。

氷群に告白しようとする度に、何度となく隙をつかれては失敗に終わっていた。

それを改善しようと、いろいろと間違っではいたが自分と真剣に向き合ってくれていたぴよん太。

人とタヌキという、異種間での何とも不思議な関係が、今になって大切な支えになっていたのだと、杉彦は思い知らされる。

「で、でも、・・・.. その調、子で、す、ぜ、ダンナ・・・.. .ダンナに・・・.. どうか幸あれ・・・..」

プツツと。

命の糸が切れて、ぴよん太は動かなくなった。

「つつつ！！・・・びょん太あああああああああ
！！」

激しい慟哭と共に、杉彦の瞳孔が大きく開かれ涙が一気に溢れ出した。

深い悲しみが杉彦に襲いかかってくる。

だが同時に、とてつもなく大きな力が自分の中に宿った気がした。もう今しかないのだ。

自分の告白がうまくいくまで見守りたいと、びょん太は言っていた。

せめて悔いのないよう、ここで決めるしかない。

もう結果なんて、どうなってもいい。

この一瞬に全てを叩き込め！

杉彦はゆっくりと腰の刀に手をかけた。そして氷群の方へ目を向け、一気に前へ突っ込んだ。

そして一片の迷いなく、叫んだ。

「氷群さあああああああああああああああああああああ
あん！！大好きだあああああああああああああああああ
ああああああ！！」

杉彦は刀に全身全霊の力を込めて振るった。

刹那、膨大な光と闇の力が杉彦の体から膨張し、全てを覆い尽くした。

隙有杉彦。十六歳。

たった今この時、氷群・ハイリツヒシュタイに告白す。

長い夢だった。ここまで長い夢は初めてかもしれない。

杉彦は気がつく、ベッドの上にいた。

（生き・・・てる・・・のか？）

かすかな消毒液の匂いから察するに、ここは病院のようだ。

どうせどつかで転んだか車にでもひかれて運ばれてきたんだろうと予想する。

幸い、体に痛みはほとんどなく、手足も自由に動くようだった。杉彦はおもむろに寝返りをうった。

そこで目の前に現れたのは同じくベッドで寝ている氷群だった・

・

（えっ！！どういうこと！？夢オチじゃないのコレ！？）

むしろ今が夢のような展開になっていて、もう自分が寝てるんだか起きてるんだか判別がつかなかった。

反射的に上体を起こしてあちこちをつねりまくる杉彦。どうやら夢ではないらしい。急に心の臓がバクンバクンし出した。

「・・・・・・・・杉彦」

そこへ急に声をかけられ、杉彦は電気ショックを受けたようにビクツ！となる。おしるおそる隣を向くと、同じく状態を起こして杉彦の方を向いている氷群がいた。

「はっ、はいいい！！」

もう夢でもなんでもいいやと思い、しっかりと正座して氷群と向かい合う杉彦。

改めて見る氷群は本当に美しい。

窓から差し込む太陽の光が、彼女の美しい髪をより神々しく輝かせていた。

顔はすっぴんだったが、その素肌のキメ細かさが天性の美を司っている。

瞳の中では光が蜃気楼の如く揺らめき、杉彦に幾多の銀河がひしめく無限の宇宙を連想させる。

そして、女神や天使をも軽くりようがする柔和な笑みを称え、氷群は杉彦に優しく囁いた。

「・・・・・・・・・・ありがとう杉彦」

瞬間、ここが追い求めていた極上の天国であると、杉彦は確信した。

【16・終】主人公の戦いは、まだ始まったばかりだ……

事件から二週間後（杉彦自身、怪我は大したことなかったのだが、氷群の一言で気絶してしまい一週間ほど目を覚まさなかった）、無事退院する事ができた杉彦だったが、氷群の進言によりパートナーを降ろされてしまう。

まだ杉彦の戦闘能力が氷群と比べて段違いに無さ過ぎていたことと、氷群がこれ以上杉彦を傷つけないという意志がつて下されたある意味当然の結果だった。

しかし、また絶望のどん底に落とされた杉彦は退院してからというものの、ますます氷群に対する追っかけ行為がエスカレートしてしまふ……

「兄貴いゝ入るよ。ってわあああああああ！！」

広美が久々に杉彦の部屋入ると、壁一面に貼られていた氷群の写真が全てデジタルフォトフレームに変わっていた。紙の媒体だけでは撮影した量を収めきれなくなったからだ。

更に、一流の造型師もビツクリの完成度を誇っている氷群の等身大フィギュアが三体も置かれていた。

一体は戦闘着。二体目は通勤着。三体目はなぜか「一球入魂」と書かれたTシャツとデニムの短パンというラフな服装だった。

ちなみに、これらは全て杉彦の手製である。

「あ、あ、あ、あにきいいいいい！！なんなのコレはああああ！！！」

ガクブルしながら叫ぶ広美。

机で小さい氷群のフィギュアを制作中の杉彦は嫌な顔で振り向く。
「うるさいぞ広美。それは近所の方の情報を元に造った氷群さん部屋着バージョンだ」

「んなこと聞いてんじやないわよボケエ！！なんであいかわらずス

トーカー行為続けてんのよ!!」

「おいおい心外だなあ。ちゃんと学校にも行きだし、シルヴァー・ハントの任務も遂行してるぞ?」

「そういう問題かああああ!!」

「それより今氷群さんにあげる用のご本人フィギュアを造ってるんだから邪魔しないでくれ」

「本人にあげるのかよ!? 私にも造ってちょうだい!!」

方向性は相変わらずの隙有兄妹であつた。

「それでこそですげダンナ!!」

「うわああああああ!!」

またしてもスキをつかれた杉彦。

手が滑つた拍子に、氷群フィギュアの髪の毛を切り落としてしまった。

「うぎゃああああああ!! て、てめえ!! なんてことしてくれたんじゃ!!」

誰となく叫ぶ杉彦。

「相変わらずスキだらけですげダンナ!!」

「………つて、あれ? ぴよん太!？」

「あら、あの時のタヌキさん」

夢か幽霊か。

どこから来たのか、ちゃっかり杉彦の部屋にぴよん太がいる。

あの事件後、ぴよん太の死体がどこかに消えてしまい、杉彦は異常な虚しさを感じていた。時折初めてぴよん太と出会った山に出かけては、ぴよん太に似たタヌキを探していたりもした。それがなぜこうもあつさり、しかも生きて登場するのか………

「なんで生きてんだよ!! あの展開はどう考えても死んでるオチだろ!!」

「不謹慎ですげダンナ!! あつしはまだ死んでませんげダンナ!!」

「うそだ!! パタツて力尽きてただろ!？」

「その方が劇的だと思ったからですげダンナ!!」 「タヌキがそん

な演出すんな!!」

久々にわーきゃー言い出す一人と一匹。

「また変になりだしたし……」

それを見てまた杉彦の奇行が始まったと、ドン引きする広美。広美には杉彦が独り言を叫んでいるようにしか見えないのだ。

「聞いてくれ広美!!このタヌキはな!!しゃべるタヌキなんだ!!」

鬼気迫る杉彦。それを更にウザがる広美。

「はあ!?何言ってるの?」

「お前にも聞こえるはずだ!ささっ、こいつに耳を当てて!ほら!」

「ちょ!!急に近づけんし!!そんなだから氷群様に見捨てられるのよ!!ざまーみなさい!!」

「うるさい!!シルヴァー・ハントのメンバー全員に気味悪がられてるお前よりマシだろう!」

「七回死んで」

「七回は死ねませんぜお嬢さん!!」

「だから聞こえねえって!!」

結局、また人生の振り出しに戻った杉彦。氷群への本当の告白はまだまだ遠いようだ。

―― 完 ――

【16・終】主人公の戦いは、まだ始まったばかりだ……（後書き）

以上でございます。

これが拙僧の初小説作品とあいなりました。
何卒感想などいただけましたら幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5612u/>

ボクはスキだらけのストーカー

2011年8月4日03時10分発行